

及古集

特別  
14  
696  
22





696  
22

丙午の母

弘化三四年年二月丙午歳せれ子のちと書と云よの  
印施をうつし如比

何んのかと云ふは丙午と云ふは戌の  
災をとり是れを説説して丙午に際りて人の運命あり  
之を謂ふは必は信説に惑あはれんは如比と同  
氣の如きも人もあはれん婦人の如ひの別しと云ふ  
すもあるべけれはこまを説して日唐士子金言と云  
皆書に丙丁日主婦交を避るべしと云ふ如比  
昔より丙午の如く姓と高文と云ふは丙午も陽  
火盛人の如しなりしと云ふ陰水と對するは喜さぶ  
夜と年と云ふは道理と首よぬれはもも子のやど  
の時  
の如しなりしと云ふ生はあがうはぬまとも云ふは  
はしなりしと云ふ年歳はむはしは返る如れは又看命

讀

こく日兆

一嘗金と云書に年々ニ生る人ハ佛道天福星ノ尚リ  
大吉と云ハ他月時利ハあり  
も更なれハ東雨年ノ養生と殊ニ  
す

東雨年年中ニ雨年ノ日六日有ソハ由年々も殊ニ  
ヨクニ  
二月廿七日ハ月ハ日七  
比日土月廿五日ハ日  
とん

天明西年ノ日ハ世上ニ  
よ  
中  
生  
遠  
安

子と云云のんハ  
是と云云人ハ  
論  
年  
詠  
詠本

和長物保事御奇六十歳比五果謹誌

魁逆悟説辨

西年ノ統  
八  
西  
と  
の  
れ

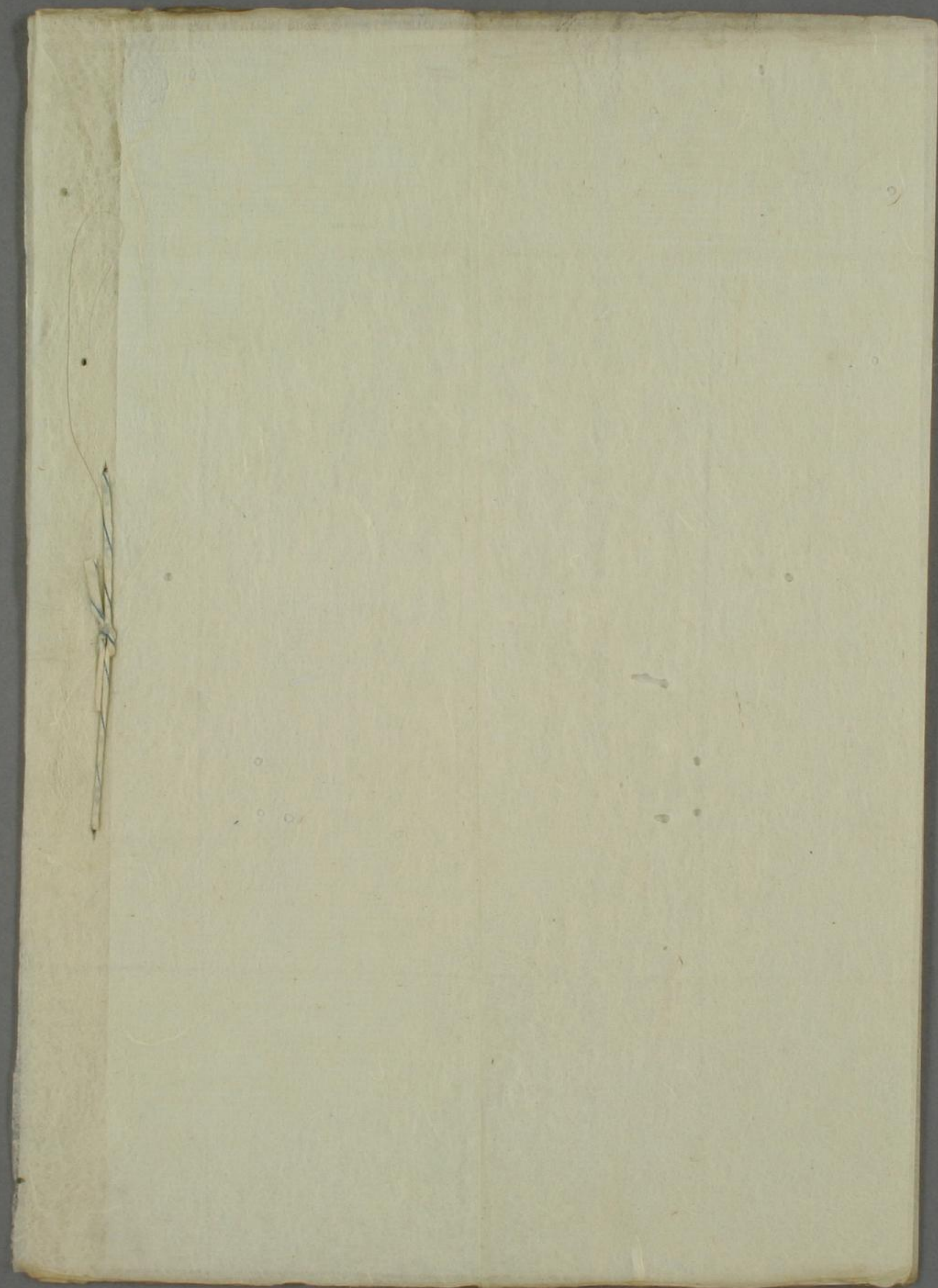
○燕石雜志

五雜俎云吹竽錄と引て云丙午丁未年。中國遇之必  
有災。然亦有所盡然者。即百六陽九亦如是耳。曲  
亭子云我俗丁未と云ふ丙午庚申の年と恐る事  
を甚しし或ハ云女子丙午の年と生る者ハ必其良人と  
言ふ或ハ云し庚申の日ハ女子事あれば其子必盜賊  
と成る故凡そ庚申の日子ある月ハ子を生む者其  
子ハ名命ハ余とてす也事危て奉説るし未よ  
り以降人の命運と決するものハ必八字と唱れ只  
其年との忌其日との忌と云よしと聞けり只  
年を忌は月を忌へし月と忌ハ日を忌べし日  
を忌ハ時を忌べし子七寅卯のナニ支と命命

當乃るの後漢の頃より既ニハリ事ハ下ニ辨ずべし而讀爲火之見。丙者。言陽道著明。故曰丙。正字通云。篆作丙。亦作丙。陽火也。伏火。光天之下盛大發揚也。壬午亦陽火あり四方、配する時ハ日中なる故ニ丙午の年ハ大災ありと云ぬれもし俗説ニ從て丙午の年大災ありとセバ壬子の年ハ亦水厄ありと曰ん士讀爲水之見壬之爲言任也。言陽氣任艱下也。子ハ陰ニ屬す四方、配する時ハ北方なり四時ニ配する時ハ玄冬なり月、配する時ハ土月なり時ニ配するときは夜半なり世俗只丙午の年ハ大災ありと云の壬子の年ハ水厄ありといハザると云ハ丙午の説も信するニ足らず

不詳

其としありと云ハ偶然乃るの今推云。太歲在午ニ曰亥壯教盛也。壯也。言萬物壯盛也亦曰午者陰陽交而撰布。故曰午。とスリ字書ニ午ハ語ことありて語ハ弱とも逆とも造とも讀て撰布ハ合布ナリ阻礙不依順曰撰とスルハ此れ丙の説ニ午の年ハ生れ乃る婦と云ハ也夫と云とも銀余家の説ニ生れ乃る年との云ハくと云とハ他てふしつれハ丙午ともて坐乃る女と云と足らず庚申の俗語ハ準ふて去るハし



男色大鑑

「酉午の女...」

身樂子句

二見久三 丑卯年本  
玄水山園名漢撰

丁ごきい...  
わくまきこ声のそんき身入

後園... 所重名... 講徳... 理海... 松田... 辰...  
...  
... 死せ

○心布... 未... 又... 水... 子... 是... の... と...  
...  
... 用之... 緒... 糸... 布...  
...  
... 死...  
...

シヨの巻

年... の... と... 死... 糸... 布...  
...  
... 死...  
...



是を以て死せしむるに... 天下の事... 治世の事... 治世の事... 治世の事...

白練抄... 元禄三年三月... 八月... 九月...

他語... 又後... 又後... 又後... 又後...

ひみよ人... 世の人の... 世の人の... 世の人の... 世の人の...

わび... 川... 川... 川... 川...

敵... 敵... 敵... 敵... 敵...

水... 水... 水... 水... 水...

火... 火... 火... 火... 火...

白... 白... 白... 白... 白...

惜愛函 <sup>天正</sup>

誠いとうつ白

元禄十三年卯本  
新集

是をいりしと云歎

知らて味しと云歎

【あま】

あまのちりまししるやアへえ  
むくろちん衣のうかきさし  
子舞る子あのみ

後山井

物らりとしてうらまよき

七頁

陶築月

布ばまのうらま一ゆを穿くあまうく〜八九ど

まんる翁

元禄十三年卯本  
新集

花の兵衛あまのうらま

我妻の海を海るむくちり

舟

池いろうつ白

あまのうらま古うらま

るる翁

長正と云歎

長正と名のうらまうらまうらまのうらま〜あまのうらま

川

備志随筆

天和二年六月日ニ云

一 盜賊も忠告のちもよは訴人〜と云

つと

消情愛合判禁る

寛延三

寛延三とも山本の人〜系の人

者以の海を惜愛三ツの

○ 金

毛

志と云歎

元弘

○ 中

○ 家

○ 明





松屋の松の心字の  
さうな  
未長

花の心 **不子** 松屋の松の心字の  
松屋の松の心字の  
松屋の松の心字の

文通集

松屋の松の心字の

松屋の松の心字の

傘笠考

又花の心 松屋の松の心字の

詞作

松屋の松の心字の

松屋の松の心字の

○一文

○花

目

松屋の松の心字の

松屋の松の心字の

松屋の松の心字の

松屋の松の心字の

○つ

傘笠考

松屋の松の心字の

蓮

松屋の松の心字の

松屋の松の心字の

○牛子りえ  
[和歌] 人端一川 破さ放流 常より 常れりり 各よ 各よ 各よ  
[漢文] 破れ放流 常より 常れりり 各よ 各よ 各よ

○傘  
[和歌] 是月日月の 内めれと 古製に 如何 有り 有り 有り  
[漢文] 是月日月の内めれと 古製に 如何 有り 有り 有り

○つり  
[和歌] 今月の 皮にて 體  
[漢文] 今月の皮にて 體

○つり  
[和歌] 今月の 皮にて 體  
[漢文] 今月の皮にて 體

○つり  
[和歌] 今月の 皮にて 體  
[漢文] 今月の皮にて 體

○つり  
[和歌] 今月の 皮にて 體  
[漢文] 今月の皮にて 體

○つり  
[和歌] 今月の 皮にて 體  
[漢文] 今月の皮にて 體

○つり  
[和歌] 今月の 皮にて 體  
[漢文] 今月の皮にて 體

○つり  
[和歌] 今月の 皮にて 體  
[漢文] 今月の皮にて 體

○つり  
[和歌] 今月の 皮にて 體  
[漢文] 今月の皮にて 體

○つり  
[和歌] 今月の 皮にて 體  
[漢文] 今月の皮にて 體

○つり  
[和歌] 今月の 皮にて 體  
[漢文] 今月の皮にて 體

○つり  
[和歌] 今月の 皮にて 體  
[漢文] 今月の皮にて 體

○つり  
[和歌] 今月の 皮にて 體  
[漢文] 今月の皮にて 體

○つり  
[和歌] 今月の 皮にて 體  
[漢文] 今月の皮にて 體

○つり  
[和歌] 今月の 皮にて 體  
[漢文] 今月の皮にて 體

○繪

指染紙をよめるものと云ふに

是は如何なり物之末考八重川抄の巻の部

○三ハ世

是は如何なり物之末考八重川抄の巻の部

権僧正公朝

世に於て人のさるる大格を云ふも思まういふと云ふ

夫木鈔世二六帖題

○三ハ世

是は如何なり物之末考八重川抄の巻の部

如く玉一

○とくり

○ふ三々

○筆呈考

是は如何なり物之末考八重川抄の巻の部

○熊谷

○指染紙

つばら 是は如何なり物之末考八重川抄の巻の部

○大あま

是は如何なり物之末考八重川抄の巻の部

黒い袖は白き布よりつくりて其高世れのおぎん

いづら世中云に又天相著筆集に註文時佐権右んはり九師正事

○大あま

○浮世初巻

一月代身の子と述刺中を録後巻くといふこと

袖の大あまをいふまがりに川出三つねにむかうやうに

とやいもん云に西産大座 年の以ハルハカ花ハ

○十三何の書の編

○うき世と

○らんこ

北国曲

廻らうの曲比初うらんこ

ナリ  
亮示

○場交り

希新

文久二壬戌主八月廿二日即洲花中合何海之上以集安の  
坐城跡馬を渡りて二海らるる若公海軍長浪場交り  
以之と用む同九月十日 紺糸春鞆及市谷川包籠  
糸殿之義用むらふ一は是は表是紋子一浪表全舟社  
幸竹書其面白初夏格子と同九一乃一回一合表計  
至と用ん文久三壬戌二月西水の中初ら初上京に付  
舟の供中山梅中子等花の同表白表紅浪交り是め初

○お山の

○丹分備

○津手

○表付

名所

文久二壬戌主八月廿二日即洲花中合何海之上以集安の  
坐城跡馬を渡りて二海らるる若公海軍長浪場交り  
以之と用む同九月十日 紺糸春鞆及市谷川包籠  
糸殿之義用むらふ一は是は表是紋子一浪表全舟社  
幸竹書其面白初夏格子と同九一乃一回一合表計  
至と用ん文久三壬戌二月西水の中初ら初上京に付  
舟の供中山梅中子等花の同表白表紅浪交り是め初

○山



○水口を

文久三年正月三日の雪華の白雲葉の所先を不初次以て申す月五日  
より同の所へ

○西行の道

○月てり

刷毛序集

のりけとらや時あめりてり

吟水

○花の道

二葉集

春をそとあめり花つて

あはとまらるる  
ゆはとまらるる  
人麻呂

○茶を備へ

○おぬき備へ

○くちの道

解説四時集

若かりし僧の怪しき

其前

上流のくちの道  
山崎の杉柳の枝に  
松の枝柳の枝に

松水  
木花

御説ふよこ

論語よしの道とてあまもてあめり人へ  
の取申せのよこ木よて人へ  
の道の軽きと物と物と徳若の道の  
のんこまのくち見人何よ  
よよよのよこよこよこ  
よよ人のは合形  
よよ人のよよよよ  
よんくち或時  
よのよよのよよ  
つてよよのよよ  
の今よのよよ  
さしよ人の魂をよよ

んといは支とあきまきとつづく編をさる〜思まうつら  
 のつさまやうたおもひ別をい〜とえう人のよ〜  
 あ〜ととつらんは塗まの内の目ままれ〜

○平送

著聞集一侍従大納言藤原通光のする（？）の門  
 法印の房少依とあそつられ〜と云〜  
 初夢とこ〜子〜はと〜とるん〜つら〜とるや〜つら法印  
 平をよとま〜つら〜のい〜ら〜とら〜とら〜

○先王

先王のいさまりやあ〜に愛の小ま  
 愛の小まのいさまりやあ〜に愛の小ま  
 愛の小まのいさまりやあ〜に愛の小ま  
 愛の小まのいさまりやあ〜に愛の小ま  
 愛の小まのいさまりやあ〜に愛の小ま

いさまりやあ〜に愛の小ま  
 愛の小まのいさまりやあ〜に愛の小ま

後久

愚雅組

後久ハ大坂御所〜後久の同や〜あゆむ時  
 後久ハ大坂御所〜後久の同や〜あゆむ時  
 後久ハ大坂御所〜後久の同や〜あゆむ時

北原花軍

北原花軍 日〜く〜あゆむ〜中〜後久〜  
 北原花軍 日〜く〜あゆむ〜中〜後久〜  
 北原花軍 日〜く〜あゆむ〜中〜後久〜

正保二年

正保二年 一の巻あるもの〜後久〜  
 正保二年 一の巻あるもの〜後久〜  
 正保二年 一の巻あるもの〜後久〜  
 正保二年 一の巻あるもの〜後久〜  
 正保二年 一の巻あるもの〜後久〜  
 正保二年 一の巻あるもの〜後久〜

は糸ハ柳亭の百高云々  
りね本書とれしとある  
の

**胸笈** 用

器

ぬん足儀 光儀とも云  
又時正  
も本記の二枚がうぬもぬん足儀もど昔

ハ大名の柳翁がうぬもぬん足儀もど昔

しとて加あそやうきまきうぬもぬん足儀もど昔

補足儀一足うぬもぬん足儀もど昔

先すくもをきうぬもぬん足儀もど昔

伊豆山に海とつき糸とぬぬのこんがよとをきうぬもぬん足儀もど昔

**忠臣伝** 大正記 尾身所の尾信袖ちぬぬもぬん足儀もど昔

ぬぬの足儀もぬぬの尾とぬぬもぬん足儀もど昔

ぬぬの舞袖とぬぬのぬぬもぬん足儀もど昔

とぬぬの品をぬぬもぬん足儀もど昔

ぬぬのぬぬもぬぬもぬん足儀もど昔

ぬぬのぬぬもぬぬもぬん足儀もど昔

ぬぬのぬぬもぬぬもぬん足儀もど昔

ぬぬのぬぬもぬぬもぬん足儀もど昔

ぬぬのぬぬもぬぬもぬん足儀もど昔

ぬぬのぬぬもぬぬもぬん足儀もど昔

ぬぬのぬぬもぬぬもぬん足儀もど昔

ぬぬのぬぬもぬぬもぬん足儀もど昔

ぬぬのぬぬもぬぬもぬん足儀もど昔

ぬぬのぬぬもぬぬもぬん足儀もど昔

ぬぬのぬぬもぬぬもぬん足儀もど昔

正保記  
 正保三年戊午...  
 世のつく...  
 ...の...

傾城のおしらは口おともぞうはま

傾城のおしらは口おともぞうはま  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

忠臣平記 古代...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

あさびとさねがのつらきしとくあさびとく化務とびまねく  
けしひすまのさくすうしる松母あうとあひま

その山と山の間には... 山馬

と相成流り

洞有詔

家々の... 洞有詔

お上の首尾と... 切後

お上の首尾と... 切後

お上の首尾と... 切後

お上の首尾と... 切後

お上の首尾と... 切後

お上の首尾と... 切後

お上の首尾と... 切後

お上の首尾と... 切後

お上の首尾と... 切後

お上の首尾と... 切後

お上の首尾と... 切後

お上の首尾と... 切後

お上の首尾と... 切後

お上の首尾と... 切後

お上の首尾と... 切後

お上の首尾と... 切後

物名... 山馬

山馬... 山馬

山馬... 山馬

山馬... 山馬

小千の情... 夢の... 柳屋の。

後山井

る中代祝言のしと

世も長く... 夢の

如真

本朝国語

お... の... の... の...

あふの飯

お... の... の...

江戸惣麻の子

名物... 川柳の...

江戸中... の... の...

川柳の...

眉作

庭訓往来餘抄

仁和寺眉作

忠臣黒太平記

衣箱もみ... 江戸... 女前が...

の... 江戸... 女前が... 江戸...

所くも... 江戸... 女前が... 江戸...

大全 智禅師曰 羽平代皇... 眉鐵月... 淡春... 内満... 向小桃... 柳屋の。

和氣清庵

如真... 江戸... の...

あふ... 江戸... の...

か子集 鬼とれ... 女成り

久松

いっく... 江戸... の...

尾と... 江戸... の...

新修水鏡後集

いん... 江戸... の...

玉造小町子社裏

櫻海

鸞鏡つら歌うた手て之日青黛アヲ畫眉ウヅメ而好ニキ

鳳谷云

氏中文

深の幕も花のこと  
唱合や字のまはし眉作り  
夢想國師のまはし丸蛛

少夕  
無倫  
調和

如屋

もの深き  
いさよふぬはづる海にけり書川か書一  
まがごらんき心くえれは清もつふよ  
胸美用 如屋も人夫も日中  
少の

想の事の名三全 如屋を

神田湯所

山塚

宇田川所

井、法寺

芝社門前

口、美奈の

如屋やハキヤのびんつ多油の茶外らんげ  
入るよハあふねと如屋のちのちあやあや

を此秋集の序に「く小袖の冬このの冬  
中、それ思ふと、あふねに」又胸美用 泉沢一後づり



く知屋のいづくはうと見え一とく云い

**後曉海亭**

少將の奥の上にも花ちうとく

よろよろ知屋の白ひとんま声

形成

**花若花軍**

黙知屋くさいみや香と流んてこ

**新曲録のりし**

うつげが海の中い知屋のうわらるときぶんとハ顔灰とめく

もこのあり也

**物語きぬしう海**

わうききうくやてり海とり

黙らよもの

海亭の改中い知屋とよま文一調和

**詠いしうありき**

くされり」とりの歌と

知屋ハ物語のゑわ代

空也三をる葉よめありあり

ソウ白きあり」とい

日一知屋とつこは是る婦のね

**探本**

こをるるい知屋の鏡うと木のてれ

**何分通一巻**

あらけい知屋の海也い憂るは心交

小南と出くまのあめ

幽山

**○言諸事**

**七百五十一**

わつ月ハ二年まおとこいおきく

聖賢とあしけんあど忠い

らとをるうある人を群とるん

を泉 信使

**○朝一書**

**厨七序**

けつねははらふの扇一とるん

林延山 和界

○服系看板

俳諧立巻組 一こもこも理うか吹ぬく既川 丑文子母  
まやめまの形に三首をん心 其考

○石堂

王日五十巻 形展まににわくれくおんここ  
まいる川にのりまよりよとそ 仙堂  
おとほふす大のこらまひより 如く吹  
正七

七百五十巻

○綿ほし一巻 ころり袖肘ゆるらん 仙堂  
まにこつ物作ほし一巻の結ていおが 改定  
大為少島中の中なる 其考

○赤い巻

○松こまき 内庭とぬくあうあまやま 疏まき 奇丹

○東巻

○松こまき 松こまき字こま、町やあのか 文松  
と布まき 旅への空まき物やを布まき 可也

○風の神おとし

陶美月

踏文紙おとしのつれづれ油まきと消板まね  
送のとうり板神おとしのつれづれ油まきと消板まね  
うらぶしー川とこまくらまき 鏡境何巻

折しきの首とまねまき

改也

是とえよまねまき 篇の年巻

永重

形えとく強は扇も巻目

可

〇作り花  
朝産  
巴靜  
副毛序集  
るくろくそとらんをくまろく作り花  
あしりろくそとらん 霜の氷きり

〇雛うり  
朝産  
副毛序集  
一雨もあつてもどりの花くもり  
ふくれくもくわつるいもどろ

〇高き人  
千来入  
副毛序集  
月方の高き人そとそと一海さき  
水高きついでくわつるいもどろ

〇しらべ  
十舟  
副毛序集  
しらべのしらべのしらべ  
しらべのしらべのしらべ

〇大船  
大船  
副毛序集  
大船のしらべのしらべ  
大船のしらべのしらべ

〇初水  
初水  
副毛序集  
初水のしらべのしらべ  
初水のしらべのしらべ

〇春の陣  
春の陣  
副毛序集  
春の陣のしらべのしらべ  
春の陣のしらべのしらべ

〇るん  
るん  
副毛序集  
るんのしらべのしらべ  
るんのしらべのしらべ

○種二回  
伊世おまよ  
まよとわらぬあめ回

○へのまよ

伊世おまよ  
口へのまよこまよやつこ

伊世おまよ  
おまよおまよえーえんごり

○ぬいあがまよ

○兄のまよ

まよ袖わらむまよまよまよのまよ  
ぬいあがまよ  
○ぬいあがまよ  
まよまよまよまよまよまよ

○ぬまよ

まよまよまよまよまよまよ

川  
まよまよまよまよまよまよ  
○ぬまよ

○ぬまよ

七百五十五

まよまよまよまよまよまよ  
まよまよまよまよまよまよ  
まよまよまよまよまよまよ

川  
まよまよまよまよまよまよ

○子佐郎の子とてあり

金山井

よきくめを此の子とてふは極

主筆

川柳

此の子とてふは極の子佐郎

○べんく〜〜〜

漢山井

長き道はつらき道なり  
くちかよふとあはれなる

秋の夕べにづり〜〜〜

此林

○茶全堂

瓶詰五雜俎

茶全堂とある所あり〜〜〜

阿文

川柳 茶全堂とある所あり〜〜〜

前茶也

○音のうらみ

鏡史三

よつとわつとまもも〜〜〜

六條のゆきや花の音のうらみ

今日ハ余のふんこせんがく

あはれ〜〜〜

○酒子集

鏡史三

酒史三とある所あり〜〜〜

老少の酒の油のゆき〜〜〜

○酒子集

鏡史三

昔は酒と酒のゆき〜〜〜

鏡史三

昔は酒のゆき〜〜〜

鏡史三

昔は酒のゆき〜〜〜

大前  
其意  
一紙

永正九年三月廿一日

○長後俊

寛延三ある集よりいよと云へどもあま  
いよと云ふと  
扱と云ふ老翁と云ふと云く長後俊

後山丹

下子のとく後俊と云く春日が如見  
た双身 ふうき品入来下子の後俊

○改中

寛延三ある集よりいよと云へどもあま  
いよと云ふと  
扱と云ふ老翁と云ふと云く長後俊

後山丹

白兄 兄をさししゆいなり旅中  
別れお見し鞠結しし其旅中

○改中

寛延三ある集よりいよと云へどもあま  
いよと云ふと  
扱と云ふ老翁と云ふと云く長後俊

○柏子母

主務の柏子の母と云く柏子母け 不致

後山丹

○国山 松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く

後山丹

○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く

○松花を多し先を後く

○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く

○松花を多し先を後く

○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く

○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く

○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く

○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く

○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く

○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く  
○松花を多し先を後く

淡山丹

○巻第十八

淡山丹の巻第十八の巻目

丑元集拾遺

○足袋

休書上巻

足袋の巻目

淡山丹

○つんが

えきうぬうの巻目

去来問答評

○花

花の巻目

四回

○おのり

淡山丹

○おのり

おのりの巻目

○固

俳諧五雜組

俳諧の巻目

○おのり

胸の巻目

胸の巻目

○おのり

川

川の巻目

ひろあき  
王臣元年

○れまらひろあき

●あんまり

比の字跡をよめらる

在歌籠

初編

或三島共 四言祭と子歌と

大河人比の久きく采のよむ四言祭のよめる四の言

女官道

○日比布

り兄 次第

日比布ののののと拭去ののののの

岩屋

○信濃

信濃布

信濃の

信濃布 其言式 三つ今 信濃國 其言式 信濃と云る

其言式 信濃と云る 信濃の 信濃の 信濃の 信濃の

信濃の 信濃の 信濃の 信濃の 信濃の

○浮世

貞丈書

浮世儀と云物 貞丈書 貞丈書 貞丈書

貞丈書 貞丈書 貞丈書 貞丈書 貞丈書

貞丈書 貞丈書 貞丈書 貞丈書 貞丈書

貞丈書 貞丈書 貞丈書 貞丈書 貞丈書

○番儀

雜活筆記

明曆年中と云る 雑活筆記 明曆年中と云る

雑活筆記 明曆年中と云る 雑活筆記 明曆年中と云る

雑活筆記 明曆年中と云る 雑活筆記 明曆年中と云る

して今世ハ亦ハはりれど



出張頭中

馬心得隨筆 一後三七年合戦

繪ニ長柄拍拵タルカ者ガ出張頭  
中披リタル画アリ

○ホリリ頭中

○ホリリ頭中

温故要略一ホリリ頭中ト云事一北史ハ昂テ塞翁ノ事也

塩壘タル頭中シカワリテテノ不承承テテ寒テ防キケルニヤ人  
改王其徳風ヲ皆知ク之ヲ計

○馬車

川柳 馬車多ク走リケルコトハ  
氷入ノ斗で流シケルコトハ  
馬車多ク走リケルコトハ

深草

素豆三行部 素海松と云

昔ハ世ガ三味線ト云ハ且好ムハ夜夜花見ケルコトハ  
ハ今世ガ三味線ト云ハ且好ムハ夜夜花見ケルコトハ

まは宝永の流ありてわら

つらと深

續境海系

印今

つらと深の夜夜花見山や村もさか

長房

川柳 虫のむしけりからり  
らりらり



川柳 虫のむしけりからり  
らりらり

川柳 虫のむしけりからり  
らりらり

山の尾原

尾原をせえりり原山の相成り

尾原をせえりり

山の尾原も、山蔵の相成りてり

れば本太とつれまをえり宝永の比きう流り也

こまき原

細少原 旗多の尾らんりこまき原 武宗

中流し原

中流し原

りよしをハハ流し原ぬ交り 信元

うこえ原

細少原 ころてし人の名やうこえ原 一草

いぬ原

いぬ原

いぬ原をぬえりり交り 水

交り

大坂交り原の尾り原の相成り 智の行世教

うこえ原の相成りをせえりり

何連原

何連原

何連原の尾り原の相成り 智の行世教

何連原

何連原の尾り原の相成り 智の行世教

いぬ原

いぬ原

いぬ原の尾り原の相成り 智の行世教

いぬ原の尾り原の相成り 智の行世教

いぬ原

花深の山中の山  
花深の山中の山  
花深の山中の山

淡境海草

昔吟我集

淡山井

淡境海草

花深の稚子きうのひまふり

西三

淡境海草

花深の稚子きうのひまふり

西三

淡山井

花深の稚子きうのひまふり

西三

花深

下地と花色に深上とぬしーのこさくらの皮  
合煎しー四たん深上とぬしー明礬二面すーくぬ  
すーくぬしーくぬしーくぬしーくぬしー

花深

下地と花色に深上とぬしーのこさくらの皮  
合煎しー四たん深上とぬしー明礬二面すーくぬ  
すーくぬしーくぬしーくぬしーくぬしー

紫のけい入深のニナ女も深下  
柳色深

同書 柳けいもこのけいと二入ん深く上りけ明  
磐二面入深くよ

河東を竹深

同書 玉子色の土滑石等分とよ  
一ニ入ん入と深くよ

吉園深

拾玉日田留衣室 下地を花りら  
深上のとめ三の出るねく深くよ

いと茶深

同書 下地深黄  
二へん深上のとめ  
明磐二面水くきく深くよ

六の鼠原

同書 下比後草三條と其上のけりもく墨少く入ぬのり  
一枚入添くよ

五の鼠原

同書 子・皮と所やをしせん一はニ是合三へん條上り  
と分んハ明標答一両出くぬるこく死すも添くよ

四の鼠原

煤竹

同書 本がーとふくとき積段くら少く入添くよし

鼠と竹原

同書 大豆のこりれけ本がー黒少く入二へん添く  
加減よ

茶と竹炭

同書 滑石あはれふくとき 延てまぶこのけ ぬめり  
一枚入三巻んやと深てま

夜中竹炭

同書 大豆のおのけ 生藤脂一枚入二巻ん 深上のおと先が  
むしやまけのあくを二へん 引くま

系補保

陶器用 府元くう深也のわきま 深の二字又いざ  
これの所くうま系補の深入るう 是う町かあはれを  
くし

黄がくちや

陶器用 正月布子をまじらけ 黄がくちやあまきるもの  
もま何のりあぶりし 拾玉用信長室 楊梅皮ニ石二吹す  
入二巻ん 深上げ 明礬壹ありの かつまを 深くあし  
黄唐茶深のあまきるもの

もえぎの色 明菴

**胸象月** 正月布子と名をくもえぎの色、深うのふろ  
洲涉うかハ岸ノ色ハ一ト

牡丹の色 碧天

**秘藏繪** 青名器画

つづくこののさびと...とのせうも光る...秋の夜の月

**浄土井**

浄土井...浄土井...浄土井...  
浄土井...浄土井...浄土井...  
浄土井...浄土井...浄土井...

菅草茶深

拾玉日圓信茶室深初のみ合之法...菅草茶深...  
菅草茶深...菅草茶深...菅草茶深...  
菅草茶深...菅草茶深...菅草茶深...

新齋茶深

**日言** 新齋茶深...下地と名を其上と楊梅皮...  
新齋茶深...新齋茶深...新齋茶深...  
新齋茶深...新齋茶深...新齋茶深...

あふとの系派

同書 あふとの系派は、此と海黄派次とも、皮のけいへん  
派上のと先ハ明鑿二面出〜ツ収ナリ〜今もこの派也  
派とす〜

相傳唐茶派

同書 楊梅皮ニ物けニ分苗のけ三分入ツつれナリとら  
あふも三層ハ派上のとあハ出〜グハク〜明鑿ナリ〜  
〜〜〜

こゝろの派

續世時談

在取門の内ニ一本錦布ニテナリと云ふ派と云ふあり  
是國の名ニ〜拾刺森玉を海り〜五古〜内ニ  
ナリ〜派ハ錦本派〜此梅の本と云ふ也〜今も此派と云ふ  
つ〜種名〜百舌語〜男色本派〜今も此派と云ふ

あふ茶

五古〜の皮〜一交派其の上と  
〜〜派〜

凡そ本てナリと云ふ  
派ハ名の也

種名 百舌語 男色本派 今も此派と云ふ



おぬ茶

み古の内の「おぬ」の皮を「ぬす」令々々墨天を瓶てけしる灰  
の汁つき糸こソフる

〇 けんがの漆 又黒糸漆

袖漆

み古の中「おぬ」漆を、皮を四交入り漆令々々  
墨付几こもをいづくびも漆物也

さくやけんりくくろくろくろく油 可全

「糸」の「糸」の町中沢おんをうれ糸とく云々の

この所「けりれ」町の名を以て同書「あまれ」町の所より

「おぬ」糸はあつたも「さく」糸はあつたや漆と「さく」

糸を大坂から  
糸を大坂から  
糸を大坂から

糸糸

「糸糸」糸糸の町中沢おんをうれ糸とく云々の

山と「先」糸糸の町中沢おんをうれ糸とく云々の

糸糸の町中沢おんをうれ糸とく云々の

糸糸の町中沢おんをうれ糸とく云々の

糸糸の町中沢おんをうれ糸とく云々の

糸糸の町中沢おんをうれ糸とく云々の

糸糸の町中沢おんをうれ糸とく云々の

糸糸の町中沢おんをうれ糸とく云々の

糸糸の町中沢おんをうれ糸とく云々の

糸糸の町中沢おんをうれ糸とく云々の

市松小牧

後世評談 室曆明初 以任師川市松とつて其長を  
著す。評判よくと大に流形し。其流名と向は

つらん深

洞窟語園

市の後よりの名。洞窟とて人の可斗の海とくも。日  
西とつて其人の入とつらん深の暖と集とく。流形は此名  
幸よく。其流と流り。

里末の原

里末の原 塗師一とありの内もちやうら塗師のふたふた  
はたふたつうふたの原とよむの原に任りきし河石の原と云う  
にこのよむ

あふまの原

あふまの原 今、東へとこはらふらふら生きせん樅ぼん木たけとよむよむ  
のこまももやうも右とハハと流のちがふせもやうちがふ花はな林りん春はる  
二あきや原名ぬぞめももまうらうの物好右の物好被あ所とそハ  
一白の月ひれ今もまご堂上この女中ハ右内あり。被あ  
被あと引ひふふいさふも上代めさうくあわうくくそ  
そんゆれ右の原を原え久の次流りこく又同くよ  
わぬ原はなりのよむよむ

友の原

友の原 地くら地元のこより進入道ありしを昔此町に流り  
中へ申せんまゝに原ありしやわらむに流りぬ

平中河原

平中河原 地くら地元のこより  
ようさうら地くら河原とよむ  
て地元のれんがにたり榊さかきさきもくまふとよむふたつ  
よれ原はまきに菊きく河川がわんの流りこと上へもまら地くら  
ら原とよむ



三つがみ ミツクミ  
水 ミツ 色は深しをいふは深きひり  
尚方

まぐわー 煤竹

葛金三産業袋 全く煤こそ火す竹のまぐわー

仔細深 文化年中後日トーとミ

路考茶 文化の改とやうし

三馬路世用 路考茶の嵐 仔細深は三馬路考と

丁子茶

いふにた世袋 けしら丁子茶といふもふのまぐわーの深き時  
代とくまきしらの交物深しと見つけ物と時のおとく  
又よらうりあやう

名物深 名物深元文化深き

いふにた世袋 平中深をいふ深きすし深き名物あやう  
深の深きありまきし代の本まきし又同書に相成深  
りの名物とす

茶を係

茶係のひんげり

美全を茶係 中古ハ幸なけ係を如く一古のくは係を如くも中うくく多くハ移あれらうもおれく御書仕も中うちちやを如どりハ係ハ流すおの南京のち海うとるりくとく云く種彦の百言話につぢるるの事とりあ系は

お茶を係

美全を茶係 ちちやを如とくハ係ハ流すおの南京のち海うとるりくとく云く種彦の百言話につぢるるの事とりあ系は

蜀江係

蜀江係

素袍係ソムの系

河川係

河川係

年の陽を袖下を人穿しを中世人まで地也  
 地あききおとく文まがサ切竹屋も烏句んどのありとも  
 中うには入く又河川係とよはくらの名を引きぬ川も格段  
 とおれく海もたぐひのこてもすうには入く

おんじん源

いんぎんをいんぎん 比ハツ杯きん 舟津和らめん 一しと京  
源の仁入し 御歳比おんじん源云々

つし源

いんぎんをいんぎん

御歳の源云の系

御源

いんぎん 一しと京の源云の系

御源

おんじん

いんぎん

更古源

いんぎん 一しと京の源云の系 一今所迄の源云の系 一今所迄の源云の系 一今所迄の源云の系

もく深

親元日記

後、あると書きし深もより天化

のあとにさとしがまうし「是は新編百集」に

「正徳の文の初と文の入とて成りたり或文字初入  
しと文の入とて俗とありと深と云と此文字の深なり  
よ初初とてわうてと好みの如く深と云ん

深の子

深山井

是やいりく深のなむのこ

休和

中野の深の子 三馬 深也 此は 三馬の文化の深なりとあり

あまぎ

浅葱

まかひら

標



ろりふん 艶艶

ごりら 葱

○飾屋鴉原

○所巡飾屋東那

多津細り時... 鴉原... 飾屋... 東那... (Main text on the right page)

黄蘗原

年中故り記

作大也... 昆虫の榮と云ふらん... 黄蘗原... (Main text on the left page)

西原

西原... 黄蘗原... 西原の書跡... (Text on the far left page)

黄藤染

年中故事記

今並染家多々愛深明王と云ふ父  
如謀りて何れ明王深物とてしめは身毒ハ佛  
かく教生と禁改故は登と此のものと屠家  
いハ深染又同く洗ね何れ佛とてしめは  
柳大已貴命昆虫の災と去らんる為に忠の深染  
本とんと染るるいと教へ今黄藤染はと羊虱  
と去るの如ひて深染別といはれど云ふ事

七尾ん染

北回曲

九月廿七日七尾ん染のうら

三計

延擧 栲色とてきくは女のちをりぬるるりちかへりてか

内色はきくは女ちのちをりぬるるりちかへりてか  
明のちきくは女ちのちをりぬるるりちかへりてか  
何のちきくは女ちのちをりぬるるりちかへりてか  
あるのちきくは女ちのちをりぬるるりちかへりてか

栲色

栲色のちきくは女ちのちをりぬるるりちかへりてか  
古人の道  
栲色とてきくは女ちのちをりぬるるりちかへりてか

栲色のちきくは女ちのちをりぬるるりちかへりてか  
栲色のちきくは女ちのちをりぬるるりちかへりてか

〇栲色踊り

栲色踊り  
よ云云人遊をまきくまきくは女ちのちをりぬるるりちかへりてか  
栲色のちきくは女ちのちをりぬるるりちかへりてか  
栲色のちきくは女ちのちをりぬるるりちかへりてか  
栲色のちきくは女ちのちをりぬるるりちかへりてか



○雜笑躍 [カレシヤ] 是乃歌守山ありつゝの又の口<sup>ノ</sup>後因位長と雜笑  
 方々各師の時信也月夜小<sup>ノ</sup>雜笑大<sup>ノ</sup>後因位長と雜笑  
 うちうち<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>月夜小<sup>ノ</sup>雜笑大<sup>ノ</sup>後因位長と雜笑  
 うちうち<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>月夜小<sup>ノ</sup>雜笑大<sup>ノ</sup>後因位長と雜笑  
 うちうち<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>月夜小<sup>ノ</sup>雜笑大<sup>ノ</sup>後因位長と雜笑

○小夜踊

七百五十一讀一

柳之<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>同<sup>ノ</sup>小夜踊  
 押之<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>同<sup>ノ</sup>小夜踊  
 ○餘鴨酒 [川] 鴨酒 [川] 鴨酒  
 三人<sup>ノ</sup>餘鴨酒 [川] 鴨酒

○土佐権

おどり

[陶笑] 土佐人<sup>ノ</sup>おどり [陶笑] 土佐人<sup>ノ</sup>おどり  
 放下<sup>ノ</sup>土佐人<sup>ノ</sup>おどり [陶笑] 土佐人<sup>ノ</sup>おどり

○お盆

[北君] 北君<sup>ノ</sup>お盆 [北君] 北君<sup>ノ</sup>お盆  
[北君] 北君<sup>ノ</sup>お盆 [北君] 北君<sup>ノ</sup>お盆  
[北君] 北君<sup>ノ</sup>お盆 [北君] 北君<sup>ノ</sup>お盆

[川] 川<sup>ノ</sup>お盆 [川] 川<sup>ノ</sup>お盆  
[川] 川<sup>ノ</sup>お盆 [川] 川<sup>ノ</sup>お盆

仙景云  
今が九頭に望田  
に池に花と確比  
べく田舎にきき音  
より古ゆえ又堅田  
の所をなれに松花  
ひも早くより  
みちを金おどり  
せしめり

花より後の後

おとれ人まであつくさきうららんらん 後作

盆

盆くくおどろぬちの斗の星う焼鈴を食小女福うお

おのが國がうととあひのおどろあえうひり中こそ豆ス

ぞんもく確 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

松花は海舟の糸 【名】 名にふる松花あり

○小ざがのおどろ

鏡境海り糸

おのちも張おとく少忠の糸

定之

ねますこけののおどろあま

井 兄

盆うしひしとひし

日

中村又光雅長陸軍  
ありおとび塔城の影  
[後身系] 二月の  
流

○ふさめおどろ

まる以上記

相整凡記  
安良のすくふり

○麻兒寫本

燕石 佛石

○かざらおもてくおどろ

けいん小なれま

- 一 一 ひとしうまのあけ
- 一 一 後くくまるふすひの
- 一 一 袖のうあそを
- 一 一 ひくま
- 一 一 月りう
- 一 一 うたよ
- 一 一 あまの
- 一 一 とう

○小倉おとより

衣祿正徳...  
 下巻在り集世の人...  
 りといふ...  
 のぶよのつま...

いといふ...  
 のぶよのつま...

原の一本

淡山井

伊勢の...  
 伊勢の...  
 伊勢の...

淡山井

伊勢の...  
 伊勢の...  
 伊勢の...

倫如  
 正甫  
 芳心  
 可之

自長十九年...  
 江戸...

淡山井

い...  
 い...  
 あら...

淡山井

あ...  
 あ...  
 あ...

因治新  
 友之  
 政永  
 季吟  
 函明  
 重祝  
 素玄  
 杉茂

○小倉おとより

...  
 ...  
 ...





○セクハ

程々の後セクハテドク多」と云云

あつちつてしまふ袖のりねえおとセクハのやうにひらびら  
たつたひらひらセクハ」と云云

ニワヤのふれすれむねの袖をむす界のうらうらアアア

○念佛おとく

糸 正保 正保の後に「折るおき」といふかきと「折子乃

并とまひせのしつふのこ佛号をととて正と向う  
念佛おとく」といふかきと「折るおき」といふかきと「折子乃

中折るおきと「折るおき」といふかきと「折子乃」  
正保の後に「折るおき」といふかきと「折子乃」  
正保の後に「折るおき」といふかきと「折子乃」  
正保の後に「折るおき」といふかきと「折子乃」

○セクハ

白足袋

正保の後に「折るおき」といふかきと「折子乃」

○あつちつて

正事記 正保の後に「折るおき」といふかきと「折子乃」

正保の後に「折るおき」といふかきと「折子乃」

正保の後に「折るおき」といふかきと「折子乃」

正保の後に「折るおき」といふかきと「折子乃」

正保の後に「折るおき」といふかきと「折子乃」

右隣之の年号  
 おくろし名所いきなりしとわづねのんていふも一ツヤ  
 ニヤヤおしんていふ  
 おしんていふ所いふ年のこととつふひはまじく

○王ととと  
天のつみむし

○獅子とと  
古本記云  
古本記云

古本記云一とすまゝ獅子とどがらんども

○石のり  
神譜五雜俎  
 一人のちりあるはうとくさめけのり

○おのり  
神譜五雜俎  
おのり

不母

①

1105

一を聞くと心をなやませしむるも重くもあはれおくれ  
 けりともまゝ我らの中へ及ばぬとこはらば  
 の冥まつともまゝあはれぬ身のこゝろあはれんと  
 都なるをたももいふあまのいふもとのけしきも  
 もらまき智恵の輝え思ふうねる西國なる火  
 禮多うでわがの浦道むらんと誦詠吟一  
 首二首三首小あまの書集一部とあしそ  
 友海の紙帯の中へ言はれしれも實も  
 向くまゝおて楓の落葉のふらぐを識るを  
 うけはる一具と自讃押詠くうまわづ愚智

流石のびし... 書ハ... 諸君の語...  
と... 後... 流石... 何...  
生... 國...

于時久元辛酉孟... 説



信光

信光の... 名... 記...

ふり...

夜... 津... 切... 女...

印... 知... 又... あり...

向... ら... 印... 手... 立... き... ん... 是... 川... 乃...

あ... 母... 人... あり... 曲... て... 後... 乃...

質... 金... の...

よ... っ... け... が... 方... 今... 身... 中... 乃... 乃...

漢... の... わ... 乃...

氏... 士... の... よ... ら... ひ... の... 活... し... せ... づ... う... 乃... 乃...  
来... て... も... 足... 乃... 乃... 乃... 乃... の... 乃...

法女のびと書ハ下ノ諸君ノ語ヲ  
と結リ息ヲ後ニ法ノ御ノとソ御ノ何ヲ  
生シ揚テ國ノ花ト

于時久元辛酉孟麗誌

四

ふりて花

根津乃後乃を夜群集し  
うり男の廊 関くこぎりひり  
夜を根津の切店の女前

ふれららん 江戸をきんを足川乃  
ふれららん 江戸をきんを足川乃

松魚よまめをせもを幸て 質を  
よひの目かま合身 柳りよ

武士のよらひの活しを 吹うらま  
来てもんま ちむすの系

Handwritten note on a slip of paper at the top left.

Handwritten note on a slip of paper at the top center.

Handwritten text at the top right of the page.

ついでに...  
ついでに...  
ついでに...

くま先の

あつちまのうさね...  
あつちまのうさね...  
あつちまのうさね...

東の北...  
東の北...  
東の北...

あつちまのうさね...  
あつちまのうさね...  
あつちまのうさね...

うさね

二目とも...  
二目とも...  
二目とも...

うさね

あつちまのうさね...  
あつちまのうさね...  
あつちまのうさね...

山のこ

あつちまのうさね...  
あつちまのうさね...  
あつちまのうさね...

あつちまのうさね...  
あつちまのうさね...  
あつちまのうさね...

あつちまのうさね...  
あつちまのうさね...  
あつちまのうさね...

あつちまのうさね...  
あつちまのうさね...  
あつちまのうさね...

嵐磨女

湯すみのくこかーいどつくま先の  
つむりおもつくりむらうつ

二月餅日をききし

ゆき玉めりきりくさの餅日

祓ひふくまききりきりまのま

東の北をらんあうきり人よりとまひ  
して其又幾百や

あつさかこいふよこれものろと  
いつとらまえーをえろと

うさね

二目とも見えぬりきねのあき  
とちね心よ思ひ培らん

るあ城

あふふはまきくる勝るのい  
身につりけりー格川あま

山のい

目をよらふ身ー涙りあま  
ふれも松魚ーぬりど

あま里

ハ一の七のいああ  
中のあよき二原のあ

視の自由あうり目く  
あちあ

梓ら失立のあも有す  
書をー今日あ

お玉が比  
玉の名も比に残りて人や  
お玉が比の名所記の  
り

月のうらみれがけり  
矢のわくして通る切  
負家女

負はれがどん比の草ハ中  
うれ怒身と成は安平れ

重誹選

もこりりふふ言七言絶句  
とあを口浅とふお  
武士

あつまひみ我まの  
あつまひみ我まの

中臣後

ありうさや八又四年  
あつまひみ我まの

仮名

富人の廊より身を  
お中わらぐうれ女  
意

三日月のくく物をお  
こつれおのち高柳の

古きす文の使りを併

河の里の使りを  
古きす文の使りを併



お玉が比  
玉の名も比に残りて人や  
お玉が比の名所記の  
り

月のうらみれはかろ  
矢のわくまで通る切石

貧乏女  
貧乏はれはどん比の草ハ中く  
うれ怒身と成は安平れ

重誹選  
もこりりふふ言七言絶句  
とあを口浅とふおウー

武士

大小さけり了武士の  
すもれる老の腰もつよま

中臣後

ありうさやハス四年  
すあーちんを神のちせん

仮名

宿人の廊より身を  
お中あらくうれ女も敵

意

三日月のくく物をお  
こつれお高柳の髪

古き文の便りを併

所里の便りをとては  
まら糸の

山ほとつもる言の糸糸乃文

十命を流しちのづんを

子とまをてよがど由んねいありと四ツ  
こえておこるひくこひくねづ

おのり

父母ちちをりまこくど由んまひ  
佛のちちひあもす

根津のちちあもす

涙地をちちあもす  
あまこちちをりまこくど由んまひ

は懐

身のおひるをりまこくど由んまひ  
あまこちちをりまこくど由んまひ

曾せ

おれををきつともんハナリ  
あまこちちをりまこくど由んまひ

飯

あまこちちをりまこくど由んまひ  
あまこちちをりまこくど由んまひ

おのり

天使のあまこちちをりまこくど由んまひ  
中くちちをりまこくど由んまひ

十命を流し

父母の名代ありて今更  
あまこちちをりまこくど由んまひ

本姓の名をりまこくど由んまひ

亦唯すく書けつるふしとのそまふ  
まをり神もこの魂推おろしき  
あさまこのふとき大樽ありあり  
おろくがふとくく怒ちりさぬ  
矢さるこのせあり和布あきんれ  
かのトトローのうごづちの菓子

武苑所

むろのふある人こまうまわ  
られせくと名のこ残りん

つん  
あざ  
あざ  
あざ

うきさん

非人

あふこの性来の且那かりさぬ  
ふよせくとぞいともふせう

愚人

三味ちんのをとすしはすしはすしは  
つらうあらぬちよしはすしは

いり草

うり草こむ花もゆりこむさうこよ  
しらすの礼を残を問口

亦唯よく書けるふとのこそすゆ  
そりけりもこの風権おつしき  
つしまさのふとき大根ありあり  
おろくがふとくく怒ちりさぬ  
文を産このせあり和布あやんれ  
かのトローのつごづちの菓子

武苑新

むすのふあの人こまうまや  
つられせくと名のこ残りん

忠告

かんぎのちてとよふつこさん  
おもつ後生れあうと

非人

ふれこの性来の且那かりさぬ  
とよせくとぞいともよせう

愚人

三味とんのこをトはすし  
つらつわらぬとよつあうり

いり草

うり草こむ花もゆりこさうこよ  
しらしの礼を残を問口

昔しをハ早良乃宮に冬を暮るあやあはれと  
 落るや踏ん氏就節の枯候もろふかこは  
 子にまにあまの具あくの枯をまろく末ハツづくし  
 馬下まゆこひさききかた初丁のこま井もろくろ  
 月影の花ははまかくさきまらてちよか花をふ  
 瀬瀬うや詠らそりまろつろく教て墨色の  
 秋のとらふ海一時あは深り新橋の木こえ  
 葉をまきかぐろ猿渡をう湯屋のふちあはとも  
 眼あこあはあはは是あん節あはの魚もやちん  
 入あ人のこみあはれそれもあうとと

早き時より時つらぢよ先法ハ其のこころりよ  
君の法ありきとてたうぬり目出さるとし  
壽ぶく君旨の何れも旅出のふりし  
ト云ひ海より深き君の思つら鞍どぬ言  
先法に供奉して古里のうらちをうらちめ  
と道坂の箱根の冥所お綴くおやんをせとせん  
と樂しむ我身の一すつらあづま海に九日の旅  
死うきすつらもかきと共なくと書きあはく小冊  
と連誅の海柳中つらつらつら中つら幾世の記に  
残しを元より沈んぬ故に思ふ何れも何れと書とも

うまゝ家久と改り年入らん月日の二日の晩ま  
ぶま歌の多のラケツコウといひひり思を  
あしはの中長家立ぬれが夜なく夜もいひ  
赤羽根のましお海りし夜にまを名にありし  
袖の袖も朝あまにみよ乃中巻揚たて  
右の方の川殿山のまは花咲川水キハ  
思徳の護義して字人申しと云ふ  
小寺の門系に依りて云爾

文久元年酉年時雨月誌

比尋常の門と御遠乃里向の川地を

かゝるの流とふを

何一つその細いちりかゝる  
比尋常の流とふのあひま

仁兵衛こつて

大石のおもむあたらしむの朝

君の昔はよづくあゝ首

かゝる

ものふの識のたの流あはれ

識せくもあつたあゝの流

かゝる

義工の名やをちて高橋仙兵衛

川海野百年の流ひを

あふりごと万年草をのまんじふま  
つらもくあふ思店のはひ

津奈川は若うたるの方一里ふたで  
横濱の廊一目三尾川

たつこえの横濱をくわをうたで  
をくわりの交易の場所

小田東中泊

つらもく小田東中の評文は水くし夜とあふひあふ  
同く名業しひらふと或人童子とを遣く求ふ

不食と業とつらもくで買人の公おうしき小田東の名  
しごまは  
相傳ききてしきまはふたうら

つらもくつらもく

あふり見ふらふはの名をうたれまを味ふ心ありり

小夜中泊

何とてうらまをふく夜は右南社の六字こあしを  
あふり見ふらふはの名をうたれまを味ふ心ありり

荒井の海

荒井の海はつらもくしきまはふたうら  
荒井の海はつらもくしきまはふたうら

今昔

つらもくつらもくしきまはふたうら  
つらもくつらもくしきまはふたうら

三尾川

つらもくつらもくしきまはふたうら  
つらもくつらもくしきまはふたうら



義孝日記

中ノ旅ニシテ尾澤ノミヤコトモ  
何カノ事トシテ田ノ大宮ニ  
為御主ノ名ガリノ表ナリ  
義孝ノ事ニシテ道ノ徳也



とんこ海流

あまの

かきくろくろく

一枚のすゑに打た馬の香

袖の辨 袴の袖乃か昔と名づく品玉つらひの袖、目の

あふぬえのくらの賑うすまはすくく

都名無圖陰

八幡放生舎の条

ちんしのけより、芝居放下師のくわを黄あそび虎もるく  
戸とあはれ、神のむく、くわ

こく日

謝  
きぬまの白

弟白葉 赤部す

物 體の猿うさぎ

□

定興の集の事六つひあへりひのあへり

とひづきくさすも存ぬしび馬

さぞあつらんともひやると

身揚ハ橋舟：ありすぬれ馬

う兄弟

唇の毛もいと実し言ふは

龜舟

七百五十韻

乃 戲舞の事の前脱路の事

世乃の集に及こすう

川 研

流りし神の事と云ふる事

細 切名

よりぬきしつねもくろくぬれ鳥

元上重

如來  
信徳

世の廣平の 宝永二年伊豆の海防の記  
序にも同下りの御座りし御座りし御座りし御座りし

増山井 関白の御座りし御座りし御座りし御座りし  
あじうらまを御座りし御座りし御座りし御座りし  
東松の御座りし御座りし御座りし御座りし

枕詞五論

子乙女の御座りし御座りし御座りし御座りし 柏柯

花の御座りし御座りし御座りし御座りし

丸魚の御座りし御座りし御座りし御座りし 鹿野

別々の御座りし

御座りし御座りし御座りし御座りし 玉皇

父の御座りし御座りし御座りし御座りし 伊豆の御座りし御座りし

わが御座りし御座りし御座りし御座りし 新曲の御座りし御座りし

りよの御座りし御座りし御座りし御座りし 御座りし御座りし

やあこの御座りし御座りし御座りし御座りし 御座りし御座りし

よしてきよりあはくをあらむかぶくやあらぬの句んがきりり  
こぶるやあらぬのま

俳諧箱袴集

元禄十四年印  
本

あつらりと

すきりしを愛の春の戸

子種名功の赤穂は十七世の長孫すまをさうくよめり  
あつらりとこれらうりて 菱小の今とりえくも袖に思れり

傘笠考

又難波笠笠三々菱笠志天樂笠林云云

かひの一名と呼ぶ述に又笠笠のふふ今世常同の  
物ぬれと古の製なりハリするふふあり未考笠笠  
笠笠作る上云る笠笠の天笠笠や始あり古歌笠笠  
し思へり今世の如く笠笠物也

葛井草集十一草菓喻思

三島笠未苗在時待者不著也將我三島笠笠

古今六帖五

杜若さうぬのすきりとまぬひきん口とまつ二年を  
あつらりと雅波すきりとまぬひきん口とまつ二年を  
女せふ袖とまぬひきん口とまつ二年を

笠笠

笠笠の年草こつむふ生山

あつらりと白山へあつらりと春の月

刷毛序

巴韻三

あつらりとすきりたむく日極む  
あつらりと早のたけやあつらりと

危言

川柳

あつらりとあつらりとあつらりと

東苑集

あつらりとあつらりとあつらりと

栢柯  
す虎





さびしげ

寛政三の暮の集り

とよみ

さびしげの暮に冷たき物も

ゆりかぜ

白兄

元禄七

さびしげも忘れ多き年の秋

昭宗

ゆりかぜも有のぬひあき

崩山

ニツ笛

寛政三の暮

むかし

むかし

活

蘭書

寛政三の暮

の暮の

増補

寛政三年

うきやわ

かつま

くけわ

まんあやう

あぢい

おちい

こづと

ひき

男

とび

わう

け







年玉くねる 津あぶつ

見はがし

**泡語きり稿**

前白糸元禄十一年  
年印本

次あしくよりはか」と云歎

ゆり候はは 研察め見はがし

女坊主

**懐ひとうあるき**

正徳元五年  
印本前集

まへり」と云歎

**車花集**

女坊主のまへり」と云歎

女坊主

女んち女坊主 ぶちくはし」云歎

女んち女坊主で物ち所

**談海**

明暦三丈と云女坊主は  
名文五のち

法順坊

女んち女坊主 三浦法順坊」と云歎

くさ、云又

**下り系六**

新町のりくしゆん因」又或書は

新町山あや芝月うチ山とアラス」

**浪首丸の巻**

うしゆんがまこち」のふち」りやまよんは新町のり

とてんりり

**北女園紀原**

抱女町と法身」か抱子の難と云き

足あともちをまこちハ抱あき

とてんけうとソをま理も

い男をも」大り合遊ソハ

の狂言」ホの次合遊の」

高世のま」まさきちま

後園ソこくとりんりり

」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」

ぶら坊

柳亭の松之海の家を、松葉集に「晩極」詞に「中  
花べのむとぶら坊をおかへ」とあれは、松葉集より  
もつと、松葉集より詞ありし  
やと松海

十合集

松葉集 名のつねと松葉集よりやと松海  
香林 三三

松の坊主

松葉集

松の坊主、松の仁王門

松の坊主

松の坊主、松の仁王門  
あちこちを、松の坊主  
松の坊主、松の仁王門

まどくわ

松の坊主、松の仁王門  
まどくわ、松の坊主、松の仁王門  
松の坊主、松の仁王門  
松の坊主、松の仁王門

雨か泥坊

白兄集

泥坊の中と、雨か泥坊  
泥坊の松、水、松の坊主  
泥坊、松の坊主、松の仁王門

ぶらぼう

ぶらぼう、松の坊主、松の仁王門  
松の坊主、松の仁王門  
松の坊主、松の仁王門

甲入  
へらけりて万  
をづる

かゝるに、  
り春白、あつた、  
の音、  
しと、  
の、  
く、  
百、  
い

油坊

右の條、  
之、

花法

多の、  
其、

福林坊

醍醐紀談

正平山崎美成傳

陸奥國今津の山中、  
セ、  
を、  
五、  
わ、  
と、

和漢語考或同

例、  
西、  
あ、  
二、  
と、

小坊

まくり

大、  
小、  
大、

一、  
ま、

本居業  
ついでにさしとや加坊之  
後飯のよはしこ夜  
もあつても加坊之  
事多し

俳諧次韻

杜百子韻

酒の月お加坊との夕ぐれく  
と東流しやる泉の泉水

陽水  
能青

泥坊

俳諧次韻

出づると泥作りのあふ念無量  
泥はう消くおの火を

揚水  
能青

あまの湯

あまの湯  
あまの湯の湯かららるる  
人の心もあまの湯  
あまの湯の湯かららるる  
あまの湯の湯かららるる

あまの湯の湯かららるる  
あまの湯の湯かららるる

湯水

東花集

東花集  
東花集の湯かららるる  
東花集の湯かららるる

湯水

一可法師

寮坊主

一可法師  
寮坊主の湯かららるる  
寮坊主の湯かららるる

湯水

直三尾

直三尾  
直三尾の湯かららるる  
直三尾の湯かららるる

湯水

其 餅の名

△秋の花餅

飯團餅

俳諧雪千句

月影を七女もつし餅の  
しつとあつし餅の

山宮山集

山宮山集  
山宮山集の湯かららるる  
山宮山集の湯かららるる

河海集

河海集  
河海集の湯かららるる  
河海集の湯かららるる

世話文章

飯團餅

貞徳狂言百首

貞徳狂言百首  
貞徳狂言百首の湯かららるる  
貞徳狂言百首の湯かららるる

刷毛三平

刷毛三平  
刷毛三平の湯かららるる  
刷毛三平の湯かららるる

俳諧五雜俎

俳諧五雜俎  
俳諧五雜俎の湯かららるる  
俳諧五雜俎の湯かららるる

其考

折式文成  
三曲折ハ只  
あつ餅の名示  
貞徳

吾吟我集 慶安三年

昔人か懐ふ内なるこゝろをこれとゆふにぞり日ハ世のついでに  
そまのこゝろに思ひはしくこゝろに思ひはしくこゝろに思ひはしく

毛吹草 定安五年

昔より流るる雪やさるる雪や  
冬来りたる雪をさるる雪や  
冬来りたる雪をさるる雪や

冬来りたる雪をさるる雪や  
冬来りたる雪をさるる雪や

暁賦 一 つとぬらるる物ゆき可あ橋の雪をさるる  
餅の餅よありとをさるる雪や  
物よありとをさるる雪や

物よありとをさるる雪や  
物よありとをさるる雪や

△新條

西山集 明曆二

ちくちくは世もさるる雪や  
ちくちくは世もさるる雪や  
ちくちくは世もさるる雪や

ちくちくは世もさるる雪や  
ちくちくは世もさるる雪や

春の雪は世もさるる雪や  
春の雪は世もさるる雪や  
春の雪は世もさるる雪や

春の雪は世もさるる雪や  
春の雪は世もさるる雪や

△善哉餅

詠詩七百十韻 延享

又梳ふれば世もさるる雪や  
又梳ふれば世もさるる雪や  
又梳ふれば世もさるる雪や

山吹草 明曆二

よけらるる雪は世もさるる雪や  
よけらるる雪は世もさるる雪や  
よけらるる雪は世もさるる雪や

よけらるる雪は世もさるる雪や  
よけらるる雪は世もさるる雪や





△吳服條

富永忠信抄 卷之二

山崎大右天和吳服條  
田之守留海が筆力

△裁世條

屋曾馬辰詔 明和年 裁世條の二巻と晒巻

古圖子裁世 卷末 高上より裁世條の巻有故と八合書

裁世條と云ふ條元禄七年(1700)京都より賣りしは認國と刻りり裁世とちと  
名付し元禄の末より名付裁世と云ふ支ありしより今より裁世と云ふは  
賣りし裁世と云ふもよく云ふれしは名付し裁世と云ふは  
云と云ふは名付し

和國諸職繪畫

美川師宣  
自享和二年印本

の北井

あつた  
まのこ

足腰せは社の田のよのいふのちか  
あつたまのこ山のよの月

裁世の字九ハ  
タコノ事し肩米麩  
博知彈丸煮蒸噉之  
と有籠亦字丸取  
語の字九ハ九の子の  
字又ハハ形し知をコト  
りし彈丸の字の  
轉字を云ふ



裁の字  
條と十の字ハ何曾食裁條  
上石作十の字と云ふは出づるは

師進 上條の字  
其為裁の字

**下巻狂言集** あらう今世に 侍りては 産屋敷の 坊のいぬも 縁と  
 いふそのいぬも ちうあまの 玉もあまの 縁と 是を縁と して  
 縁の玉もあまの いぬといふは 縁と

いぬといふは 産屋敷の 坊のいぬも 縁と  
 縁の玉もあまの いぬといふは 縁と  
 縁の玉もあまの いぬといふは 縁と  
 縁の玉もあまの いぬといふは 縁と  
 縁の玉もあまの いぬといふは 縁と  
 縁の玉もあまの いぬといふは 縁と

碓井もち  
 碓井又名也

やせぬ條

〔 〕

産屋敷の玉もあまのいぬといふは 縁と

思ふ月やいづれあはれのやせぬ條

側濱もち

**京雀** あやのこちりりまも ともとせけ所 菜子屋多  
 して 側濱もちの 余もあまのいぬといふは 縁と

枕もち

**菜子屋** 約連

約ひきの 水や菜子の 枕もち

牧草

粟もち

二系少産 地方守の所と云ふ

けりいおわあうともいふ。粟をうとて、焼く。ゆきもち  
はるら〜 石のありとて、粟のもち、小所の名なり

葛もち

山の井 三月八日の二をくいふ山のうらうかとひきつれ  
をくいふ〜 葛もちとわううらうかとせむすう〜 時  
のきこあり

早稲もち

早稲もち 藤切

早稲もちの多やが馬の系なり

種再

○ 乳母餅

伊留系天皇系會 む〜 直に源氏の正統にたまたま義賢と

いつい永禄三年九月 信長 忘されぬと子孫尚のありて、乳母  
の餅とて、御代友のこもとのそあり〜 が受よりて、誅滅せらる

その何れ兄をのりあり長期よのぞんで、其乳母と孫切  
まぬきけりといひ、けり〜 三月よと、教真宗の力とて、しよ

附屬一級乳母とてよあひて、とて子と抱き、春月の殺より切ゆ  
て、外と抱むる月をされと、其長育のよりあり、けり餅と別す

と、性還の道と、けり名を家の物かどは、むらり、けり子ハ  
よ〜 あらるこを、養ふ〜 ときと、打る〜 けり、自ら、信

実と感して、これと、買人多く、後、遊、小、店と、買、し、れ、を  
是と、ぬ、る、は、信、厚、の、例、と、ぬ、る、乳、母、が、餅、と、を、と、も、て、を、  
し、り、り

たい原 津加長家化

七男の孫也

たに原と云原と別也 勸南くは名義流多介  
一説ははく秀右公 行入 陸の時代とて 治定  
味ありと称せしむいしより 大國傳とありしと又  
定 二年をたしむるも其心苦楽とをりた少は同直  
の初とて侍りし原と云へしと寂し文と無也  
より三年 願の者食す原とていひしと正流とて  
とも又お方々令せし大敵の如くぬらとて 昭々  
原とていひしとていし事の名義我々成我知又山田  
岩園の今々の其因甚る又祖父 中幸と云ふ時治  
よりより祖明傳止 事以物少治殿の 唯

案し 曆術の同答ありしと云ふの門に 吾祖

少し 不源の首しと云ふありしと云ふ  
終よ名義 及び揚也 入は内しとて 早く  
之雅は 尚も汝とて 先の之と 吾祖とて 折り  
もりしとて 不日しとて 又お汝し 尚も 一日  
旨と初し 尚も 日は原と 吾祖と するしと 以て  
偏是形も 多く 其文 宛成しと 少きやと 云ふ  
二つ合せ せたりしと 二文 宛 求められし 是  
より 今下の 如く 九く 成しと 抱れ 九く 大  
敵伝と して 後の 之を 燒伝と して といは 世に  
傳り 汝りし 元日 夫れ 吾祖と 云ふ 云ふ 云ふ 云ふ  
亦 始なり 吾祖と 云ふ 云ふ 云ふ 云ふ 云ふ 云ふ  
先年 汝下 之を 傳と 云ふ 傳有 云は 名義と ありし 云ふ  
傳と 云ふ 傳と 云ふ 傳と 云ふ 傳と 云ふ 傳と 云ふ

源三條

指原三巡覽

飾磨車歌

市中ありて人々よき言ひ昔候家の奴僕より餅をよ

ととよりてあたまの肉の固めれいさうのりしくこ

つらひもち

木子集

かさあひこま川系らちよつらひ候  
そのつらむと作つらつらひもち

俊吳

つらひもち

理小

ちきらばとらくマここのよまむもち

春水

秋の草ぬけぬ女が初はすなむ住  
号四澤堂 流波中流の物云

芳沢あやめ

清春

享保年間

近友曲入高

南

郭

名元香俗  
字子遷父元祐云  
天保二年同取世七十七

股部小右海門

友樹

諱原字惟命号顯軒は別小  
川村の産分部産の百姓

中江右海門

玉陽の流し学香慶安元年戊子八月二十方五日卒

文二

文苑男下巻二條町

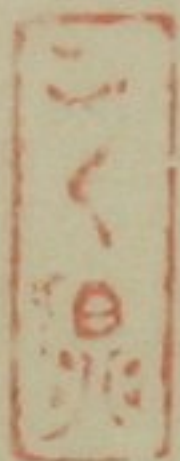
若 文二

朝湖

肥前佐賀の人湯崎は江

景山 仁助

三寶曆九年己卯六月  
七十八日卒  
京都



或初母を以て而知と云ふの程  
方知々入る所なりにはいふに及  
しまたの道や香川に帝樹を好  
しし入るる所なりにはいふに及  
未の年、初白名所此の事  
我師一統立てんかよふ所也  
其りの求つとこそ、自の欲と  
たんとするも、七首を退くと  
これ未の事なり、名所の事なり  
其初を及つ、いふ所の事なり  
義成先生を我にすも、わ  
日こふふ、いふ所の事なり  
年、又まわちる、月、又  
中のいり、は、夕、雨、云

鳩巢

中流のうねり名直清は天賦の才三  
任享保己年々 家重君の師と名

新助

文基

有職古多し墨を以てし  
時、新助と中流内府通義と  
の女男と、流中細言と故

野呂宰相

曾水

名正住

成瀬真人正

馬琴

本傳、門下、三保三五年、東振遊藝  
梁、三才と稱、武家、老堂、奉公

伊勢左衛門

鯉長

一、此、以、世、画、ヲ、執、筆、以、て、其、所、向、り  
家名ヲ丹波也とす

中村兼三郎

一高

生所を激別、若村、高、中、代、衣、老、及、而、云  
号友他、三、信、う、派、子、回、信、故、三、車

佐友捨花

夕堂

名、檢、亭、杜、吉、保、以、若、村、高、中、大、名  
小路、住、居、又

若山壯吉

探元

薩州、若、中、中、會、師、山、島、上、路  
探、元、子、子、子

亦初輝隆

文山

元氣人、江、東、人  
墨、花、堂、此、卷

佐々木

應山

世、之、第、一、和、名、一、二、之、類、殿、の  
所、息、之、元、和、始、代、の、氏、名、街、と、す

近衛信子

大山

弄、春、名、重、之、字、四、号、四、五、高、と、す、又  
六、六、山、人、櫻、櫻、子、大、拙、山、村、山、本

石川左兵衛

文

東、漢、山、人、三、又、老、人、世、高、居、士、又、俗、而、ち、り、三、別、強、海、都、泉、の、々、三、産、代、漢、根  
の、高、中、寛、文、十、三、子、是、之、月、二、三、日、九、十、七、日、卒、す、少、子、名、長、号、評、仙、堂

正木也高丸

竜眼

浅、子、並、不、可

小野川

重政

信、長、二、任、之、後、秀、吉、公、の、家、中、に  
任、ん、秀、方、の、女、之、号、身、葉、子

北尾左助

風律

号、多、美、庵、評、流、門、人、族、の、女  
小人

亦、此、也、氏、名、流

新名

号評仙堂

貞杵

号由縁之白菴花坊門人浪花の人  
享保十九年没以

永田

五山

名相承下告 諱御

菊池九右衛門

重孝

父之傳新紹由三人没后乃改戸清文下改  
判發しく紹益又律云と不實に也

灰屋之南玄海

阿比光蓋之男茶屋敷の者あり其人の事十一にきくは元禄四年五月十二日  
壽六十二才ら死に冷心説今い平野左衛門之弟といふ者の別置とて今も茶屋敷に  
名づり一子孫もあらじ和年鞠の飛古井推車とて門人三徳は後茶子といふは  
宗徳の門人 都上五實三任

天氏

号詩佛北山門人

大空彦柳太右衛門

父花

父三之文号雪山十吾二孫明任人

菅 文右衛門

左記之云門人ありんやと説 文中 文章 文指 文明 苦文送 文章録

董弁

三ノ口ニ又号号武大三郎

本公本正輔

日折三右衛門

善信門下ニシテ其由國若松町  
毎改三任

生方造酒

尚信

初ノ名ヲ一信之ヲ号自通而中島編

将野之鳥之助

其花

此為系 公色印信方及介

前田健助

一蝶

号 莫名潮湖之ノ又号信勝  
元文元之秋年十月二日死 諱也

多賀長八

於ら以信也のくまの一劇也古も古も自らも信子の也

蜀山人

修書

一平四才系長といふ公義行徳在  
又養徳といふ云云香花園 字子祐  
又養徳といふ云云香花園 字子祐  
又養徳といふ云云香花園 字子祐

大田直次郎

石川初介

洛考

四代目

瀬川菊之丞

精齋

信友一高といふ人あり高田松平といふ  
の傍に

昌 菅子之助

此徳 翠字  
稱後七左三門  
守三 翠字  
日休 三才士



景樹

初上の子と不姓年  
西園の富長と次男とより母と母と

祖徠

生國の上総号松城字物茂  
牛込一任又喜保十三日申年正月九日

醜

身信

号探出齋永真号田叙法印又名正信  
こよ孝信一男寿延室二宮年十月七日

橋例

号探出齋永真号田叙法印又名正信  
こよ孝信一男寿延室二宮年十月七日

香川肥後守

号東鳩亭又松園  
初景周上園寺里谷道北

秋生惣右衛門

号探出齋永真号田叙法印又名正信  
こよ孝信一男寿延室二宮年十月七日

山村玄海

号探出齋永真号田叙法印又名正信  
こよ孝信一男寿延室二宮年十月七日

将野采女

号探出齋永真号田叙法印又名正信  
こよ孝信一男寿延室二宮年十月七日

小治深之進

号探出齋永真号田叙法印又名正信  
こよ孝信一男寿延室二宮年十月七日

北齋

米庵

子系

常信

信多

之之

号探出齋永真号田叙法印又名正信  
こよ孝信一男寿延室二宮年十月七日

号探出齋永真号田叙法印又名正信  
こよ孝信一男寿延室二宮年十月七日

号探出齋永真号田叙法印又名正信  
こよ孝信一男寿延室二宮年十月七日

号探出齋永真号田叙法印又名正信  
こよ孝信一男寿延室二宮年十月七日

号探出齋永真号田叙法印又名正信  
こよ孝信一男寿延室二宮年十月七日

号探出齋永真号田叙法印又名正信  
こよ孝信一男寿延室二宮年十月七日

号探出齋永真号田叙法印又名正信  
こよ孝信一男寿延室二宮年十月七日

号探出齋永真号田叙法印又名正信  
こよ孝信一男寿延室二宮年十月七日

号探出齋永真号田叙法印又名正信  
こよ孝信一男寿延室二宮年十月七日

中瀧次元

市川三亥

河原守

河原守

河原守

河原守

河原守

河原守

河原守

素約

字伯陵山二也、その人

華新

名穆、臣佐、詩云、その人、名正、因、深、言、名、初、月、名、後、春、院、也、

憲清

名和、年、北、面、信、其、衛、尉、創、髮、所、也、自、名、也、永、久、元、年、己、年、生、也、

梅逸

名界、亮、字、明、卿、号、玉、禪、又、山、本、亭、俗、名、吉、又、名、花、家、名、衣、相、中、也、

精里

古賀

連月

上、四、月、の、初、日、の、夕、暮、村、に、在、り、初、花、院、と、名、す、

宣阿法師

法師、名、阿、字、法、師、古、多、の、と、名、す、

能因

日本、橋、又、河、川、信、賢、所、在、

子秋

本、朝、二、目、山口、利、太、郎

惺寔

初、年、首、座、選、云、名、首、字、欽、夫、播、州、龍、野、ノ、座、之、姓、藤、原、也、

四羅山

初、年、名、又、太、少、信、勝、ノ、名、也、

鷲峰

羅、山、房、治、ノ、名、也、

教正

鷲、峰、号、始、春、帝、ト、云、

公、老、白、雲、寺、ノ、中、心、

一、條、ニ、入、ル、ノ、初、日、ト、稱、ス

平、月、日、六、日、弘、明、ノ、山、中

初、年、名、和、字、明、卿、号、玉、禪、又、山、本、亭、俗、名、吉、又、名、花、家、名、衣、相、中、也、

少天王ノ中云

天王心

丁酉年江戸吉野  
三比蘇  
少天王ノ入心

講習  
加洲ニ仕名選年  
松永昌三郎

活所  
播州ノ人ナリ紀州ニ仕テ春秋  
鑑ヲ号名方名鑑字道圓  
那波道圓

香庵  
名正意藝名花江ノ香長丁未年ニ  
又香隱号元和王敬云思古  
堀五十郎

鶴山  
名元姓小野正輝晩年竹間  
人見

順庵  
名真勢字直夫系邦ノ人錦  
小路ニ住スルニ因テ錦里ト云州  
本下平之允

仕ノ名跡中  
講習ノ門

自將  
尾陽  
字德信号泉山父三芳卷下云  
宝永五年正月廿九日没八十二才并江戶并ア并相并六  
並河

宗恕  
誠子錦里号  
伊藤惣司

伊藤惣司  
山崎嘉右衛門

山陽  
書詩人  
名護字士剛支峰  
尾州

頼  
又徳入并  
三宅

道凡  
三宅

久之  
薩上麻十  
大龍禪寺玄日

首庵  
筑後柳川ノ立花ノ臣初名字正  
後改字約  
安藤一之進

蘭齋  
敬義ト云播州ノ人  
号蘭齋字嘉新加号  
山崎嘉右衛門

信京  
老後伊門ニ入リ祐天和尙ヲ師依ス  
号信京字嘉保且五月廿七日亡ニ南  
京城南性ヲ死ス  
天師治部

三尾  
三代目  
三浦全

永雄  
河川遊高ノ師建仁寺長老ト云  
如夏院ニ在リクハ一也

沖  
信 沖の司

徳和三年  
六月十八日

官名ヲ奉テテ成  
名ヲ奉テテ成  
諸君ノ人ト云  
生テ名高ニ

一の

此福氏元和四年丙午の春京所  
大井島内と生所と果と冷所の  
松田某の  
浪

不角

寛文二生

六角

善哉居 文唐  
晉子 在晋堂 晋子  
又晋子 又晋子 又晋子  
宝子 晋子 晋子 晋子  
晋子 晋子 晋子 晋子

松風

二六

宗因

梅舟

白山

之圃

野々日  
別下人全又

之圃

之圃

別下人全又

千秋

本居門外小路

横井十右衛門

典信

京川此法作父の京川云木以手  
町三三三三三三三三三三三三

惟信

養川父の惟信云木以手  
三三三三三三三三三三三三

東密

中尾橋の東密後元三三三三三三

采山松三三三

朗

治本常

一巻

雄長老の巻  
三三三三三三三三三三三三

甘井

逸

楊梅の逸  
三三三三三三三三三三三三

油屋吉郎

之治

三三三三三三三三三三三三

定時

三三三三三三三三三三三三

後

三本板上行字  
三本板上行字  
三本板上行字  
三本板上行字

花

解

花解

解

流

亘

名流郡古山信隆

秋香

女史

名菊鳥丸奥棚

井上

硯

山

名硯字子玉

吉本

雀

儂

名元字子祥

任田利平

暢

堂

名暢字實甫

步田

九

江

多景所室町

石根

柳

山

柳山名德

南部土右衛門

初

牧

朝鮮

土波

竹

圃

二条

若林

馬

溪

名馬

田中揚光

柳

島

古井村

大沼徳良

柳

沼

名守之

莊村条古

芝

水

名水

及村亞光

一

堂

名堂

東條久光

信

永徳法眼又う種信下云  
百石十人此の中場云々

守邦

探放又う探林三百石可人探也  
又う探林三百石可人探也

文村

系芬庵

川

小宮坊上校木町  
又う探林三百石可人探也

孫牛

廿五人  
百松弁

山

秀雲又記吟云云天明申四月  
十八日八十七及南條性三沈秀  
字士秀

松平太右衛門

和

改之川村代々人

永永松松

君

三河國の士と云大相秀士に及那  
曲の何とゆく白目昇天云々  
之り南條目可る津土菜の字  
信也

蘇呂里新匠門

梅

相模國久野の松平九菴の士と云信  
と云ひく松平

御厨屋伯老日

玉

相模國長政の画工と云松平九菴  
信と云ひく松平

乐

松平素名

松平越中弁

一

上列ノ人已下ノ号

谷三也

程

京

米川儀兵弁

懶

名三原伴高子ト云筑後  
久留米ノ人松平素ト云  
真名部仲卷ト云

茂井藤藏

楊

又七九三ト云

中村伸次郎

篤

上野新六木之孫松平信國信名  
正徳四年甲午八月廿七日八十才ノ身

具原久兵弁

中別改の任  
の頼卿と云細工名松平と云  
の作りの頼卿と云細工名松平と云  
の作りの頼卿と云細工名松平と云

湯上守置旦居

九之塵作當山之日記

儒

筑前

鳥保平右衛門

同

備前人後系部之位

留次郎助

真齋儒

大坂人 京氏

毛利重道

同

京氏

淵源次郎

同

備前二氏

中川權左衛門

沈茂以

息遊軒生國之院後之俊  
伯父國山三首子石高信  
菜田山下氏

熊澤母郎八

朗

字叔清号藤屋天保西六月六日歿  
七十四岁葬新井

鈴木常八

樓園同

名如之末由少院在寺了取坊傳  
画業月之別号車軸軒胡桃  
能請保寂堂標瑞

素山

大年同

梅園

一休

字他後少松院之皇子之自稱  
姓坊酒肆狂雲子又自稱天下  
老和尚一應上九年甲戌歿

紫野大德寺祖

石菴

觀瀛ノ兄ノ弟也

三宅忠玄翁

義方

石川洋和師叔少山抄後  
源人ト云上ト任

二山派次郎

仁齋同

名維模字原佐京氏人  
称崇徳室永中没

伊藤源佐

儒書

同言山川人

竹富市郎右衛門

儒

名修運字子復祿三子名

奥村源次郎

同

名高賢字伯茂祿子名

音氏苑人

三年也年八十八歲

禮軒

守故 卷人等

是述或字題等

日

大坂三津

青地 友右史

小谷 伊兵衛

大谷 惣右衛門

厂 全 丈 七

菴 の 年 之 係

極 中 十 八 八

長 尾 志 郎 守

細 井 次 郎 守

日

名 義 中 の 丁 極 中 之 係 等

名 義 中 の 丁 極 中 之 係 等

名 義 中 の 丁 極 中 之 係 等

名 義 中 の 丁 極 中 之 係 等

霞崎

許成子 古訓 上 云 大 石 山 崎

沛城

四品後 之 藩 臣 四 百 七 十 九 録

栄 野

大 田 丈 郎

日

坂 下 河 三 十 七 石 井 九 郎 守

神 崎 九 郎 守

坂 下 河 三 十 七 石 井 九 郎 守

近 香 半 二

宇 治 四 郎 守

海陽 福根元

且 二 五

三 尺 園 崎 之 係 唐 右 保 海 守 各 人

坂 本 秀 乃

中 年 一 十 八 歳 之 三 尺 園 崎 守 各 人

八 橋 拾 五

世 小 治 三 高 尾 三 子 衛 左 衛 門 守 各 人 等

名 義 中 の 丁 極 中 之 係 等



海より取らるる月和と云ふ  
りて後公名勝工の文と  
いふなり

琴

九別業の

玄降

三味線

中村宗二

三味線

由良法光

三味線

石村換

三味線

虎以換

月

山の井換

書 助

字子勉 雙相子号 春日郡 四谷  
村之人 字子勉 從天保丑  
三月七日 歿 十九日 長光寺  
長光寺下

丹羽嘉六

儒

京人生 二儀別 石村在

牧善情

梶子

字條の以神と云ふ 茶所也  
つとく茶と云ふ也

藍

作在三白門 海堂也

塩田又之助

道齋

善名男 名慎字永甫  
本名換

朝川晋四郎

母

三味線の長ウ入をトと云ふ人  
初加賀都

柳川換

竹

神谷

云

名換

比

水回

百

友堂探丸の全書

長

徳士 貞任門人 宗任人

浪

都之歴史... 國の凡俗...  
 天徳十八巻... 徳の別人...

箕山

香舟... 都迎衛の人...  
 此山... 又...

後本

牧之

秋人

後... 秋人...

世寿

三丁... 天保... 安永...

秦

日淋

觀高

内田

東谿

各元宣赤坂町

音

生茂岳工

南陽

山陽男...

頼

華山

三民...

海巴

光

小 五筆

舟菴

善菴門...

堀川

白石

居保人...

荒井

知解由

頼君

此訪...

志村育三

昌後

浩城町

板倉玄珍

翁徴

浩城町

石野日祿

茂雄

後...

堀 三玄後

系知

匠山后

白後尾竹太

長甫

匠山后

三吉二郎玄後



字 物 名正章

物園 物名

葛城 琴平 太丈

定家 太丈

膳山 太丈

利生 大坂 太丈

鳴門 長治の人物と云

鳳山 東所ア三平 竹俣若人 今言橋との  
ア三平也 佐川 孫ア 既膳長云

畧外 宝曆三次

福内

文一 安政七年 正月 條物ト  
打地 條物ト 能正 家士  
文一 初 文一 文一 文一

谷 文一 文一

四明 由多 園山 爲云 大名 中條

井上

教高 俗道記 爲云 先生 二 若村の 近後  
紙後 言 四九 字 先生

井上 仲

祐信 宝曆年間

白川

昌世 中世 四有 通 爲云 大御 言 通  
斯云の 人

小宮山

自休 天和 中 條 爲云 一人 ト 爲云 宝永  
中 故 二 系 ト 本 ト 爲云 先生 中  
在 字 保 爲云 二 月 九 十 文 爲云 平

深見

曲翠 馬場 堂 勝 爲云 爲云 爲云 爲云 爲云

菅沼 爲云 記

紹巴 永禄 年 中 爲云 爲云

里村

宣光 依系 正 二 位

依 三 位 少 納 言

九代... 相承... 井... 共... 光明

宣條

信傲

卧雲

小町

慶壽

北山

懐堂

正三位清原朝臣

翰林主人

安永の江濱其巻小牧に住

小町

有院の女又良身其瓦  
新屋村園寺と申日昌寺共  
内二塚有

伴夜成

江田

山本喜六郎

松沙養

詩禪道人

藤城丈人

久守

言治

松堂

松洲

室

英中

浪高石村儒者

江戸生三法別名村高士  
三馬先生之伯父

平柳園 松江に在り

溪海の國有之邦國中の  
里人

松洲園

月

香川

梁 新十郎

伴夜

善平目

松村

百松下院

鏡見寺

角井元守

香川

光茂

上作舟右近將監

雲山

白一母三學一山名

官人

夫山

小山

名山

竹苑

竹苑一高塚

沙河

年史

大苑深苑

氏興

山之井三位

琴臺

名耕字子藏一號一師景宗  
知後白鳥生景宗一在村下  
下谷之左後山門向山全一

東條文虎工門

録法

北山男

山本良由

如亭

白木門派

敬高

萩原風二所

資政

日野大納言

家厚

云一

花山沈

右馬

口友

宣長

留別松坂

本居保比所

有功

白桂正三位

文雄

歌堂字子一  
極本上在

井上

林布の国正寺高  
初通徳の北九良字  
色之伝又平軒明之信

紀

以道全と号  
明四年十月廿日死

依平

遠平の東道達  
依平郡山古名  
改三三三三三

元倉宗多落

春信

信世五所

治樹

三保啓

信平小日

治平年比所

中空

名臣信平世元号  
平分山内信平

白井夜切

既白

字美都菊秀  
四月九日没  
明国虎林人  
信平

陳元贊

圓空

信和守正室  
四月七日没  
信平

深田

徳氏

字世教号平  
年高利人  
信平

細井基三郎

太玄

水元の所  
信平

松平大炊次

清閑

信別二を  
信平

内及波河守

道全

天正四年十月廿日死  
信平

田中庄之助

明宗

正清字晋甫  
信平

深田宗信

慎齋

正倫字子孫  
信平

深田清藏

厚齋

正統守美之慎  
信平

深田佐市

九阜

正益字子謙  
信平

深田九郎

南陽

東陽男名弘道  
信平

深田

市川千兵衛





共信

父所之つぎ 山内所  
父身之つぎ 八可也

柳慶

素川

因信

父身之つぎ 田松水可

伯清

貞信

父身之つぎ 一八可

梅新

親和

一善四人八  
父身之つぎ 田松水可  
父身之つぎ 田松水可

大妻宗君

甲斐

父身之つぎ 田松水可

三井孫兵衛

仲敏

父身之つぎ 田松水可

上田帶力

春珠

父身之つぎ 田松水可  
父身之つぎ 田松水可

上田帶力内室

香山

父身之つぎ 田松水可

石川忠次郎

恒山

父身之つぎ 田松水可

堀田治右衛門

徳丈

父身之つぎ 田松水可

大塚源五郎

竹山

父身之つぎ 田松水可

中江善太

柗齋

父身之つぎ 田松水可

和氣行茂

善庵

父身之つぎ 田松水可

朝川五郎

履高

父身之つぎ 田松水可

泉澤教太

養信

父身之つぎ 田松水可

暗川院法印

父身之つぎ 田松水可  
父身之つぎ 田松水可

父身之つぎ 田松水可  
父身之つぎ 田松水可

雅信

父晴川 白子

勝川法眼

訥言

京

田中

廣尚

住吉丹記

廣文

住吉丹記

山雪

山雪子山雪子

野法橋

左明

性平

原内通大兄

棟隆

棟隆の弟ついでに二弟丹東藤合の

稿掛

玄井

玄井の弟ついでに三弟丹東藤合の

金屋三尾の抱

密山

子安

谷口

逸雲

長崎

木下

詩画 太し

大山藩中 生所澤州

村瀬 太し

書詩 石南

清人江雲 関氏名璞字玉英

釋 石南

画南北一 南耕

故東暉先生門人名勤字

大角 南耕

画南北一 芝山

御幸町使小路下

白川 芝山

画北宗 逸翁

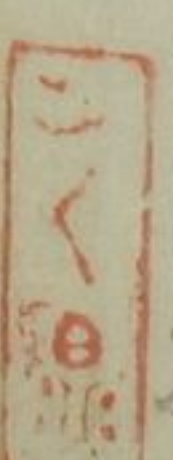
法橋 名篤字孟敬

石田 逸翁

画南宗 九春

錦小路東洞院西入

生川 九春



畫書及詩文 南北宗合

畫南北宗合  
後山

初學文鳳先生後故澄  
神符豐上彦門人名順祥  
如冬子初名春山四條  
東洞院南側

澤渡 精舟

吉田 俊山

書 顯画南北致相兼

畫 敬亭

名宿一名宿字惟寅  
號敬亭 烏丸綾小路下

雨林善四郎

畫 春山

悠山門人字士善  
室町綾小路下

藤重村左門

畫 丹涯

應瑞門人字半醒  
號釋思齋 西洞  
院西中筋河前通

渡邊 政藏

畫 竹山

西六條堀川七條南  
字惟長 通稱圖書

蒲生竹山

畫 暢堂

名願字實南  
小梅逸門室町高辻上

前田 暢堂

畫 對山

名誠字成言 号茅海  
市幸町二條下

日根 對山

畫 梅逸

名亮字明卿 号玉禪  
又字亭又天十俗字吉又名藏  
正稱京衣棚市池上住名有  
南天道町市園町壹町目居

山本 拜年吉

畫 竹洞

名成昌 号東山 德士  
東山真如堂前又名昌盛  
俗奉藏 字伯明 衣棚二條中

中林 竹洞

畫 鴻雪

名大舍 号鴻雪  
東六條上馬場土手町

雲萃院

書 百年

名世壽 字子康  
号福日生樓

鈴木 百年

重唐重  
竹溪

竹洞名成業字紹父  
又卧河居士

中林竹溪

重  
竹南

名泰字右民  
日根對山在塾

桂 希一郎

鐵翁

禪僧長崎  
註

春德寺

秋水

美濃

村瀨

杏村

美濃 丁井久

三信

震山

美濃竹白字  
日蓮字僧知足  
飛進老人去  
一知院日生上人

麻谷

名迂

原

書畫  
竹仙

玉骨

室軒甥羊師下  
名徹字文執号其藕田道史  
海仙門人名常邦字子保  
新榎木町夷川下  
中島竹仙  
森寺若杖守

畫  
望山

竹洞門人名毅字國室  
号美坪新榎木町之上

大倉笠山

畫  
吳峽

大倉笠山門名競字子深  
富小路押小路下

澤 吳峽

畫  
雪鷹

諸名家入門訊画道  
竟自成一派風涼邦  
字君達号起元西洞  
院之上

穴窪田雪鷹

畫  
墨水

梧東

名樞字得中又号龜亭  
油小路夷川上

上林墨水

畫  
梧東

信美翁孫名信亮  
北百萬遍屋敷

羽倉紀守

四三三  
秋水

竹仙

平子之人

書画南宗篆刻古体  
水竹 再祥

画南宗書篆  
鴨青 社官名李護号

書画詩文篆刻  
可亭 北堂名 你見福安社

書画詩文篆刻  
月翁 和歌隸書并南アリ

宋中 風花社 鐵中道者 六角園 宜河 別其

天竺老人 六角社 天竺 禎福道人 前 后 稻屋

月老 風花堂 茗圃 小亭 中西

耕石 平安 華山 三石 海色

鶴亭 性源名長惟字弘八 毛利家僧臣

太室 名各徳字子三平 堀田ア水 徳臣ヨリシウ後參政之初 滋井平兵衛

大猷 名岳字高輝 尾久人ト人任ヨリ人ト 南宮保六郎

女蘭 女史長崎

佩芳 存勢

五岳 豊後

阿覺 長崎

玉芝 讚岐

隱居 辰幸甚

桃逸

上田

書衣 真光

ナカキキ

春徳年

開月

夜山ニ居ス

如之庵名知惜

夜岳

夜山門

榎井臣

家

武山細村花之助

激心

大直藩

小原仁兵衛

教堂

聖名文郁字

就島津九藏

山陽

字子成名襄

頼

二六〇六

星巖

字公圖又号天谷名緯

梁川

春涛

字浩甫一字方大別号  
松雨莊主人名魯曾直

杏林

徳萃

名清号秋島春涛  
他室

国鳥

氏

克堂 江戸

宮原

赤城 信易

清水

香谷 平安

村田

雨谷

河村

相帆 長崎

守山

細香 美濃大垣 詩 女史詩學山陽三季

江馬

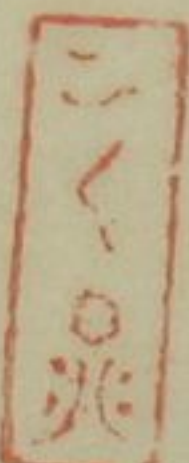
蝸庵 号澤竹

御墨所村 浄元寺

句乞利と説々

○閑室自語

為家ゆゑくより持佛りまゝ人祇を児の性も祇  
 しく一人斗之備九とをづく靈をといひつゝあま  
 明和七年の辰いくりの時松竹村の飯利の百姓の  
 乞の爲に彼人祇を叫りさきさき「P」どく「叩」つゝ  
 「P」ぬき「えん」代「い」て「り」の時「り」て句乞「く」ぬり、  
 「例」として「未」のこと高祖号祖おとの西崎之「く」  
 く知れ「さ」し「以」和「ふ」か「し」られども句乞「く」ぬり「さ」く「は  
 人祇」い「ま」れ「光」子「細」老「初」云「つ」り「さ」き「さ」き「P」ま「さ」よ  
 く「叩」し「海」し「ぬ」れ「り」夜「か」く「う」せられ作り「く」その後  
 おとあつ「う」ま「は」つ「つ」ら「ま」入「ま」され「ら」えん「代」と「あ」む  
 まとより「ま」ひ「く」道「か」ま「わ」る「く」古「く」傳「り」ま「下」地「の



うせりいれんかくとておはゆ

○備前国水北三宮名義風食禄千石舟大將之  
和方と好し一年大早の時義風が飛地トビの百姓トビが  
ひかりの主人和方と好むは徳にまをせむ昔の小町が  
例に句のうよとくぬいしと申しうの義風は  
ましく辭それとも少をひ一首とよとくまはれ  
の首座よとび踊りこれと彦神へ御祈りて  
あつしとあつりりま今今三つ六七十早  
それハ必をまふと申しうと祈りあつしかきと  
あしとく

世とめくも是こ一飯をい氏子の

田毎よくも天の川水

○閑度雑談

此別の府庫ウラクラニ長一石半斗の櫛本を楓本と云い  
社の早よも宋ニ京の尻をぬり長楯ナガタテ納り早  
損の地とあらめくらしむねハ忽ち起りぬ大ニあり  
水おとつと田地とせこのあつり時右とを完  
成西辰の年大ニ早せしふ切りしひぬが  
くうの楓本とせされこのとくありしと息りぬ  
大ニあり田地とせくはひいと此別の人の話  
○同書

右とくの春ぬあきくつりしははるに名つくるま  
旅トビとあひく御話とすまむ人來り訪ひしと奈  
さらくは社ぬあきめらりや成のあきまとも  
からじうとの降倉の石大長のぬやのうのう  
ひもく嘆しりり彼人よ其方なりく面白き



ゆづりつりのはようちんたふし人牧人とちり連く  
系とせりし時あり毎に降うく止む八井川入  
こゝのいびきをうとまりし時ふの人くわき  
しいわ今やうとそれぞ明日は必川ぬかむと  
さすむしちんたふしめをうくひききくうれん  
し二人蔵れくうれく何後ううとひひし  
くる時のもかり各ぬやのうさみく沈沈さ  
げ暗とこのり奉らんいふよとさるにえく  
とらうしと各一首うみうさうの人まふいさ  
くくく封く沈沈し伝く今うう止むか  
とくくううまきとくくううのう沈沈と  
いふるうんしと沈沈しと伝くううれん  
ありとくくううくくくくくくくくくくく

きざり時といのりしこ思きこ夜お止ぬ  
花もとく紀かこ大どらひひもさかど  
らきこら沈沈のうんどもまきどの一首も  
わしと沈沈のうらいつらんしひらきみま  
右大臣の

ふれもまのすくれは氏のおき  
あやうのくハ大沈王  
とよまのひし多のたもの字といの字こ  
旅のふきまことらうさうお文を一字とく  
むくうしとくものありれん沈沈まき  
まんが名とゆし人し申りく人のあへ  
ふあうはと賞答し沈沈し  
むりつ

完承十癸卯年六月尾筋返國書ありは水百姓と  
も之程かんざし

御教存り少くは他氏所あるものより其旨古書に  
御書にのほろび 作は別西而徳しうそ中使ハ水  
所たのこは御旨國を神とせしは是より  
暗くは依分ハシ又とまじり百姓とも信ハ其限分  
く神ハ世しはもろおと万人のくわしりさ  
とまじりし

○年中故交記 和考年抄談日

むろし徳因法師東国下向の時伊豆のまろの三一自  
のせら農氏をいとしし物なれは徳因は云ふまじりあ  
つれと云辭をりまじりし  
天のし苗代水とまじりしとあましくまじり神のくハ神

天比くん御さくあまのくれ農氏悦ハ神とつし徳因と

東海記行 説文子年 尾筋之人 磯物

三浦明

天上靈神鎮是府徳因祈ハ神和歌老  
妻道旅應信惠日照氏徳句説

○足利新将百五拾のりふとたぬく

小所ゆきの歌天の川苗代水と云のうハ家集りもええ  
と信ハも知りしとてまじり今の俗小所のゆきのとつし  
つとあるハゆき古き草紙にええハ

てりりの年しる人のよめり 御書白今の俗からてりり  
とつしや日のもとあれはてりりもあつとてりり又あめがえり  
雄長光元和年間の撰し又信巴の別しとる亦食千人の能

新撰狂言集 下之巻



験の初る。又と教感ましく、重く勅して  
曰願判あり。やと先師別る祖並し朗師像師の  
喜菩薩号と請いし。喜菩薩の号と謚り下され。先  
朗師とらひし。喜菩薩の号と謚り下され。先  
と大僧正し任りし。殊更大僧の二字と大し書し  
て天和元壬辰六月廿七日。給る尚又けし。其の嘗と  
して異朝より渡り。紺紙金泥の妙後二部。白紙金  
泥の妙後一部と傳る。今つゝ。えて當守あり。祈る  
の法驗あり。また奇なる。又喜菩薩号論昔の  
天文元年。井あり。あり。うとも同く五年の法乱は  
紛失し。ぬ云云

○厚覧草

仁王の北に井あり。首弘法神泉苑と請雨の法

行ひし。幸の時。天竺の善女沈王と請し。その  
其はたつと。後沈王東と指し。花野。この井  
の中。入る。今井も埋り。水も。其より  
うらひし。して。此の説。昔の善女沈王は。刑  
と。沈王又入る。この井。沈王と調進。其の  
し。ある。と。未代。人。沈王の説。と。り。て  
言ひ。あ。む。と。と。云。く。程。の。考

○美我直公雨林の晴しと祈祈名に使時と云り所

御願文

尾法國愛智郡桑田に坐。御天祚乃廣。た。字。豆。乃  
幣。帛。奉。捧。豆。祢。禱。竟。奉。留。今。茲。矣。酉。乃。年。六月  
十六日。國司。役。二。位。權。大。納。言。保。君。侍。臣。等。并。為。使  
天。天。祚。乃。廣。也。尔。幣。帛。并。奉。利。珍。膳。并。備。天。御

飯<sup>ハレ</sup>波<sup>ハレ</sup>器<sup>ハレ</sup>物<sup>ハレ</sup>仁<sup>ハレ</sup>盛<sup>ハレ</sup>足<sup>ハレ</sup>志<sup>ハレ</sup>御<sup>ハレ</sup>酒<sup>ハレ</sup>波<sup>ハレ</sup>純<sup>ハレ</sup>賤<sup>ハレ</sup>仁<sup>ハレ</sup>滿<sup>ハレ</sup>双<sup>ハレ</sup>倍<sup>ハレ</sup>即<sup>ハレ</sup>仁<sup>ハレ</sup>生<sup>ハレ</sup>留<sup>ハレ</sup>  
 耳<sup>ハレ</sup>茅<sup>ハレ</sup>辛<sup>ハレ</sup>茅<sup>ハレ</sup>山<sup>ハレ</sup>仁<sup>ハレ</sup>生<sup>ハレ</sup>留<sup>ハレ</sup>木<sup>ハレ</sup>實<sup>ハレ</sup>草<sup>ハレ</sup>實<sup>ハレ</sup>青<sup>ハレ</sup>海<sup>ハレ</sup>原<sup>ハレ</sup>乃<sup>ハレ</sup>與<sup>ハレ</sup>津<sup>ハレ</sup>  
 藻<sup>ハレ</sup>系<sup>ハレ</sup>仁<sup>ハレ</sup>至<sup>ハレ</sup>天<sup>ハレ</sup>種<sup>ハレ</sup>種<sup>ハレ</sup>乃<sup>ハレ</sup>物<sup>ハレ</sup>年<sup>ハレ</sup>如<sup>ハレ</sup>山<sup>ハレ</sup>余<sup>ハレ</sup>積<sup>ハレ</sup>重<sup>ハレ</sup>祿<sup>ハレ</sup>如<sup>ハレ</sup>星<sup>ハレ</sup>仁<sup>ハレ</sup>陳<sup>ハレ</sup>置<sup>ハレ</sup>  
 後<sup>ハレ</sup>太<sup>ハレ</sup>神<sup>ハレ</sup>御<sup>ハレ</sup>心<sup>ハレ</sup>年<sup>ハレ</sup>久<sup>ハレ</sup>安<sup>ハレ</sup>久<sup>ハレ</sup>印<sup>ハレ</sup>食<sup>ハレ</sup>止<sup>ハレ</sup>祿<sup>ハレ</sup>辭<sup>ハレ</sup>竟<sup>ハレ</sup>奉<sup>ハレ</sup>天<sup>ハレ</sup>恐<sup>ハレ</sup>羨<sup>ハレ</sup>  
 毛<sup>ハレ</sup>白<sup>ハレ</sup>久<sup>ハレ</sup>今<sup>ハレ</sup>茲<sup>ハレ</sup>復<sup>ハレ</sup>乃<sup>ハレ</sup>切<sup>ハレ</sup>与<sup>ハレ</sup>利<sup>ハレ</sup>霖<sup>ハレ</sup>雨<sup>ハレ</sup>頻<sup>ハレ</sup>仁<sup>ハレ</sup>下<sup>ハレ</sup>利<sup>ハレ</sup>河<sup>ハレ</sup>水<sup>ハレ</sup>屢<sup>ハレ</sup>溢<sup>ハレ</sup>  
 天<sup>ハレ</sup>水<sup>ハレ</sup>田<sup>ハレ</sup>物<sup>ハレ</sup>陸<sup>ハレ</sup>田<sup>ハレ</sup>物<sup>ハレ</sup>州<sup>ハレ</sup>損<sup>ハレ</sup>傷<sup>ハレ</sup>都<sup>ハレ</sup>人<sup>ハレ</sup>民<sup>ハレ</sup>災<sup>ハレ</sup>言<sup>ハレ</sup>仁<sup>ハレ</sup>遭<sup>ハレ</sup>信<sup>ハレ</sup>利<sup>ハレ</sup>  
 因<sup>ハレ</sup>是<sup>ハレ</sup>刺<sup>ハレ</sup>日<sup>ハレ</sup>初<sup>ハレ</sup>撰<sup>ハレ</sup>天<sup>ハレ</sup>宗<sup>ハレ</sup>豆<sup>ハレ</sup>乃<sup>ハレ</sup>幣<sup>ハレ</sup>帛<sup>ハレ</sup>遠<sup>ハレ</sup>今<sup>ハレ</sup>捧<sup>ハレ</sup>持<sup>ハレ</sup>互<sup>ハレ</sup>祿<sup>ハレ</sup>辭<sup>ハレ</sup>  
 奉<sup>ハレ</sup>留<sup>ハレ</sup>掛<sup>ハレ</sup>芸<sup>ハレ</sup>畧<sup>ハレ</sup>後<sup>ハレ</sup>太<sup>ハレ</sup>祿<sup>ハレ</sup>乃<sup>ハレ</sup>靈<sup>ハレ</sup>異<sup>ハレ</sup>仁<sup>ハレ</sup>依<sup>ハレ</sup>天<sup>ハレ</sup>連<sup>ハレ</sup>雨<sup>ハレ</sup>波<sup>ハレ</sup>晴<sup>ハレ</sup>禮<sup>ハレ</sup>  
 洪<sup>ハレ</sup>水<sup>ハレ</sup>波<sup>ハレ</sup>治<sup>ハレ</sup>利<sup>ハレ</sup>國<sup>ハレ</sup>中<sup>ハレ</sup>乃<sup>ハレ</sup>作<sup>ハレ</sup>物<sup>ハレ</sup>波<sup>ハレ</sup>丑<sup>ハレ</sup>穀<sup>ハレ</sup>年<sup>ハレ</sup>始<sup>ハレ</sup>睦<sup>ハレ</sup>團<sup>ハレ</sup>仁<sup>ハレ</sup>  
 生<sup>ハレ</sup>留<sup>ハレ</sup>草<sup>ハレ</sup>乃<sup>ハレ</sup>片<sup>ハレ</sup>葉<sup>ハレ</sup>余<sup>ハレ</sup>至<sup>ハレ</sup>万<sup>ハレ</sup>天<sup>ハレ</sup>豐<sup>ハレ</sup>仁<sup>ハレ</sup>成<sup>ハレ</sup>幸<sup>ハレ</sup>所<sup>ハレ</sup>百<sup>ハレ</sup>姓<sup>ハレ</sup>歡<sup>ハレ</sup>比<sup>ハレ</sup>樂<sup>ハレ</sup>  
 羨<sup>ハレ</sup>圖<sup>ハレ</sup>國<sup>ハレ</sup>安<sup>ハレ</sup>久<sup>ハレ</sup>穩<sup>ハレ</sup>仁<sup>ハレ</sup>護<sup>ハレ</sup>利<sup>ハレ</sup>給<sup>ハレ</sup>信<sup>ハレ</sup>止<sup>ハレ</sup>祝<sup>ハレ</sup>部<sup>ハレ</sup>第<sup>ハレ</sup>字<sup>ハレ</sup>志<sup>ハレ</sup>天<sup>ハレ</sup>於<sup>ハレ</sup>祿<sup>ハレ</sup>  
 竟<sup>ハレ</sup>奉<sup>ハレ</sup>止<sup>ハレ</sup>白<sup>ハレ</sup>領<sup>ハレ</sup>  
 以上四件一平

○川榊のる

大<sup>ハレ</sup>を<sup>ハレ</sup>い<sup>ハレ</sup>ま<sup>ハレ</sup>す<sup>ハレ</sup>千<sup>ハレ</sup>石<sup>ハレ</sup>一<sup>ハレ</sup>り<sup>ハレ</sup>小<sup>ハレ</sup>を<sup>ハレ</sup>角<sup>ハレ</sup>の<sup>ハレ</sup>る  
 其<sup>ハレ</sup>角<sup>ハレ</sup>一<sup>ハレ</sup>小<sup>ハレ</sup>言<sup>ハレ</sup>留<sup>ハレ</sup>りと<sup>ハレ</sup>捧<sup>ハレ</sup>こ<sup>ハレ</sup>ふ<sup>ハレ</sup>に  
 乃<sup>ハレ</sup>と<sup>ハレ</sup>あ<sup>ハレ</sup>え<sup>ハレ</sup>と<sup>ハレ</sup>も<sup>ハレ</sup>百<sup>ハレ</sup>夜<sup>ハレ</sup>つ<sup>ハレ</sup>い  
 ぬ<sup>ハレ</sup>え<sup>ハレ</sup>も<sup>ハレ</sup>袖<sup>ハレ</sup>を<sup>ハレ</sup>さ<sup>ハレ</sup>し<sup>ハレ</sup>と<sup>ハレ</sup>名<sup>ハレ</sup>と<sup>ハレ</sup>の<sup>ハレ</sup>こ<sup>ハレ</sup>し

能因が白とせは 俄あめ

○津花護筆

仰<sup>ハレ</sup>詣<sup>ハレ</sup>津<sup>ハレ</sup>其<sup>ハレ</sup>自<sup>ハレ</sup>三<sup>ハレ</sup>國<sup>ハレ</sup>の<sup>ハレ</sup>社<sup>ハレ</sup>へ<sup>ハレ</sup>ぬ<sup>ハレ</sup>え<sup>ハレ</sup>の<sup>ハレ</sup>句<sup>ハレ</sup>と<sup>ハレ</sup>身<sup>ハレ</sup>初<sup>ハレ</sup>也<sup>ハレ</sup>一<sup>ハレ</sup>こと  
 程<sup>ハレ</sup>々の<sup>ハレ</sup>説<sup>ハレ</sup>區<sup>ハレ</sup>く<sup>ハレ</sup>し<sup>ハレ</sup>定<sup>ハレ</sup>宝<sup>ハレ</sup>乙<sup>ハレ</sup>尔<sup>ハレ</sup>の<sup>ハレ</sup>と<sup>ハレ</sup>一<sup>ハレ</sup>大<sup>ハレ</sup>以<sup>ハレ</sup>小<sup>ハレ</sup>早<sup>ハレ</sup>也<sup>ハレ</sup>一<sup>ハレ</sup>こと  
 仁<sup>ハレ</sup>角<sup>ハレ</sup>長<sup>ハレ</sup>造<sup>ハレ</sup>の<sup>ハレ</sup>二<sup>ハレ</sup>人<sup>ハレ</sup>仁<sup>ハレ</sup>伊<sup>ハレ</sup>國<sup>ハレ</sup>在<sup>ハレ</sup>文<sup>ハレ</sup>凡<sup>ハレ</sup>の<sup>ハレ</sup>ミ<sup>ハレ</sup>き<sup>ハレ</sup>我<sup>ハレ</sup>り<sup>ハレ</sup>れ<sup>ハレ</sup>て<sup>ハレ</sup>八<sup>ハレ</sup>町<sup>ハレ</sup>也<sup>ハレ</sup>  
 予<sup>ハレ</sup>り<sup>ハレ</sup>私<sup>ハレ</sup>の<sup>ハレ</sup>り<sup>ハレ</sup>吾<sup>ハレ</sup>系<sup>ハレ</sup>は<sup>ハレ</sup>流<sup>ハレ</sup>く<sup>ハレ</sup>折<sup>ハレ</sup>く<sup>ハレ</sup>弱<sup>ハレ</sup>形<sup>ハレ</sup>也<sup>ハレ</sup>の<sup>ハレ</sup>う<sup>ハレ</sup>り<sup>ハレ</sup>一<sup>ハレ</sup>事<sup>ハレ</sup>也<sup>ハレ</sup>  
 予<sup>ハレ</sup>り<sup>ハレ</sup>を<sup>ハレ</sup>承<sup>ハレ</sup>り<sup>ハレ</sup>予<sup>ハレ</sup>り<sup>ハレ</sup>少<sup>ハレ</sup>物<sup>ハレ</sup>村<sup>ハレ</sup>の<sup>ハレ</sup>事<sup>ハレ</sup>也<sup>ハレ</sup>あ<sup>ハレ</sup>り<sup>ハレ</sup>て<sup>ハレ</sup>江<sup>ハレ</sup>太<sup>ハレ</sup>敷<sup>ハレ</sup>の<sup>ハレ</sup>音<sup>ハレ</sup>あ<sup>ハレ</sup>び  
 たり<sup>ハレ</sup>く<sup>ハレ</sup>少<sup>ハレ</sup>物<sup>ハレ</sup>へ<sup>ハレ</sup>て<sup>ハレ</sup>り<sup>ハレ</sup>れ<sup>ハレ</sup>も<sup>ハレ</sup>人<sup>ハレ</sup>々<sup>ハレ</sup>の<sup>ハレ</sup>祭<sup>ハレ</sup>り<sup>ハレ</sup>も<sup>ハレ</sup>や<sup>ハレ</sup>あ<sup>ハレ</sup>ら<sup>ハレ</sup>んと<sup>ハレ</sup>  
 一<sup>ハレ</sup>あ<sup>ハレ</sup>れ<sup>ハレ</sup>も<sup>ハレ</sup>我<sup>ハレ</sup>も<sup>ハレ</sup>抱<sup>ハレ</sup>き<sup>ハレ</sup>て<sup>ハレ</sup>あ<sup>ハレ</sup>れ<sup>ハレ</sup>ば<sup>ハレ</sup>夜<sup>ハレ</sup>の<sup>ハレ</sup>日<sup>ハレ</sup>で<sup>ハレ</sup>り<sup>ハレ</sup>小<sup>ハレ</sup>回<sup>ハレ</sup>あ<sup>ハレ</sup>ら<sup>ハレ</sup>んと  
 乞<sup>ハレ</sup>い<sup>ハレ</sup>んと<sup>ハレ</sup>て<sup>ハレ</sup>野<sup>ハレ</sup>人<sup>ハレ</sup>々<sup>ハレ</sup>の<sup>ハレ</sup>福<sup>ハレ</sup>あ<sup>ハレ</sup>く<sup>ハレ</sup>あ<sup>ハレ</sup>る<sup>ハレ</sup>も<sup>ハレ</sup>は<sup>ハレ</sup>な<sup>ハレ</sup>り<sup>ハレ</sup>こ<sup>ハレ</sup>り<sup>ハレ</sup>あ<sup>ハレ</sup>ら<sup>ハレ</sup>む













のち後神といふまじはちちをよの天の川ダのいづらあけあえ  
さうさういふまじはちちをよの天の川ダのいづらあけあえ

○四國通禮雲陽丸 七及び徳三見工

獨股山と此舟は合那流うき宗

舟中より水氷あり大海の作りよりよとよと流とのよあり早  
天の時をいふ水氷流といふすゝ忽ちあつと

○河内名所不舎會

河内名所弘川村弘川寺に龍池あり弘川の傍にあり早  
大いふと新れは雲をさうり



